

か。名であるか。否、否これらのものは、吾等の心を活かす力はないのであります。お互が一生涯、努力奮闘して、いよいよ最後の時が到来した時、今までの努力の結果を静かに考へるのであります。波が静まると、一枚の木の葉も一つの星も、分明に水面にうつります。一生涯活動して居る時は、差程考へないのであります。病氣であるとか、老人になつたとか所謂人生の荒波の静まつた時、一生涯の出来事は一時に吾が心中にうつるのであります。この時、吾がなした事、やつて来た仕事を省みて満足することが出来るであらうか。多くの人は、

「しまつた」

「つまたぬ事をやつて来た」

と、後悔の念が起るのであります。これがお互一生の儲け物であります。

第二は不安恐怖の心であります。人生最後の時に當つて、自分の死後、地獄へ落つるやら極樂へ參るやら更に判りませぬ。否、その地獄、極樂さへ、眞に有るやら

無いやら判らぬ。實にお互は、

「一寸先きは闇」

であります。此處に不安があり、恐怖があります。判らぬから困るのである。恐ろしいのである。

「人間は死んで仕舞へば灰になり土になるだけだ」

と、心からさう思ひ、さう信じて居る人があるならば、ソラ安心なことであらうが、お互の實際は、それが未決定なのであります。未決定といふことが、不安の原因であります。犯罪人が捕へられて入監した時、

「これで安心だ」

と云つたといふ話があります。罪を犯して、東に西に逃げ廻つて居る時は、山奥の巖穴の中に寝て居つても、心に安心はない。木の葉が落ちて探偵でないかと恐れ、一陣の風にも不安を感じて、終日終夜、安心した日はない。然るに遂に捕はれ

て監獄へ這入つて仕舞へば、安心して寝られるといふのであります。牢屋は自分自身の胸に持つて居るのであります。こゝが信仰と生活の調和した所である。偽りの生活、誤魔化しの生活は、不安であります。弱いのであります。眞實の世相、眞實の自分を見つめて、これを投げ出した處が強いのであります。決定があれば安心であります。未決監は苦しいのであります。お互が未來に對する問題もこれと同じであります。

この後悔の心と前途を恐れる心、これが一生の儲け物であります。諸君、之で萬物の靈長といはれるでありませうか。吾等一生の努力の結果が、こんなものであつては、實際つまらぬぢやありませんか。で、現在今日の吾々の活動、吾々の生命、吾々の生活を意味あらしめるといふことは、目下の必要であります。信仰は決して死ぬときの用意、未來の爲のものではない。人間になるといふ中心の問題であります。お寺や學校の講堂のみの問題ではない。吾等日常の一舉一動の中心問題であり

ます。實に信仰は吾々の活動を統一するものであります。この信仰のないもの、仕事は無意味であります。その人の働きは、單に動いて居るのである。衝動によつて動いて居る動物の日暮しであります。人間の影法師であります。動物にあらざる人間は、どうしても意味ある生活をせねばなりません。

三 人生の實際問題

人生の實際の問題に對しては決して逃げてはならぬ。しかし、實際の事に對して逃げずして、それを引き受けるといふことは、腹のある人でなくては出来ないことでもあります。が、それを逃げて居る人は、いつもビク／＼として、そのやつて居る仕事に力がない、實がいらぬ、甚だ弱いのであります。心と仕事とが別になつてゐるのであります。そこに調和なく統一がないから苦しいのであります。で、一生涯の苦痛、一生涯の努力は、たゞその破れさうな自分に張り紙をし、倒れさうな自分

に、ツツバリをすることである。これは本當の相、眞實の相ではない。表面は出来上つた立派な相であるが、實は影法師であります。こゝにお集りの諸君は、大層立派な、出来あがつた方々のやうであります。みなさんの御本尊は、どうも御宅に居られるやうであります。今晚、演説がすんで御宅へ御歸りになると、

「こりや、闇いぢやないか」

「火が消えて居るぢやないか」

と、これがみなさんの御本尊であります。こゝに坐つて居らるゝ諸君は諸君の影法師ぢやなからうか。宗教のお話は影法師に聞かして居つてはならぬ。御本尊に對するものでなくてはならぬのであります。吾々の日常は影法師同志の生活であります。親子といふも兄弟といふも夫婦といふも、みんなウワべだけのもので、互の心の中は歐洲の戦亂以上だ。

五 常に出て働く古狸

大阪の士族屋敷に、毎夜、狸の大入道が出ると云つて近處の人々は恐ろしがつて居つた。ところが、或る若武士がこれを聞いて四五人が退治に出かけた。夜はだん／＼更けて来る。息を飲んで待つて居ると話の通りヌツと大入道が向ふの塀の側へ出た。

「こいつだッ」

といふので、今の若武士は協力一致、美事眞ツ二つに切つてのけた。すると大入道はパツと消えて仕舞つた。そこで若武士は家へ歸つて、

「いよいよ狸の大入道を退治した、もうこれで大丈夫だ」

と近處の人々に告げた。處が翌晩になると、また相變らず出るといふ話、行つて見ると、なるほど出る。

「此奴」

と切ると、すぐ消える。

「もう大丈夫だ」

と思つて居ると、また翌晩になると出る。處がこゝに劍道の師範役を勤めて居る人があつて、

「俺が一つ退治して見よう」

と、或る晩、その屋敷へ行つた。夜が更けて天地静に眠れる頃、やはり大入道が出た。今まで若武士共は、その大入道を目がけて切つて居つたのであるか、この師範役は、ヌツと出た大入道には目もくれず、大入道の出で居る反對の堀の、空の處を切つた。すると、

「キヤツ」

と云つて消えた。翌朝、行つて見ると、大きな古狸が美事に殺されて居つたとい

ふ話があります。

これは面白い話である。みなさんの今晚の姿は、古狸の大入道ではないでせうか。みなさんの御本尊は宅に居る。こんな大入道に、いくら話をしても駄目であります。宗教の話は、日々夜々、常に出で、働く古狸を出して聞くのでなければなりません。さてお互の御本尊は誠にお恥かしい心を持つて居るのであります。これを見つける事が出来る、苦しいのであります。恐ろしいのであります。だから親子の間でも夫婦の中でも、これを見せまいとする。御本尊の奥の院へは誰も入れまいとする。こゝに人間の悲哀はあるのであります。これが人間の本當の涙のある所で、あります。この奥の院を開放して、御本尊をブチ出しさへすれば平和の生注は出来るのであります。此の奥の院の門を、教の鍵に依つた打ち開いて、中から光り輝く立派なものを出さうとするのが所謂修行とか修養とか云ふのであります。安心な平和な生活を送らうと思つたなら、眞面目に自己の本當の處を打ち出して、これを研かねば

なりません。

六 渡る世間に鬼はなし

しかし諸君、吾々はこれが出て来るでありますか？ これも實際の問題であります。お互静かに自己を考へて見ると、どうも出来さうにもありません。奥の院には、堅く鍵をかけて誰も入れようとせぬ、深く閉ぢ込めて置いて、しかも籠の鳥のやうに自由の天地に出たい、自由の境遇になりたいと考へて居るのであります。ことに吾々の不平はある。女の方では、夫は自分の心を了解してくれぬと愚痴り、老人は自分の息子は俺の心を知ってくれぬと不平を云ふ、妻の涙、老人の涙はこゝにあるのであります。

人生の旅は、恰度、汽車に乗つて旅行するやうなものである。今は澤山の人で窮屈であるが、次の驛まで行けば少は樂になるであらうと思つて我慢して居る。處が

次の停車場まで行くと、成程ダラ／＼と人は降る。降るが、またダラ／＼と乗る。やはり同じく窮屈であります。澤山の人が降つて、やれ樂だと思ふ停車場では、自分も降ねばならぬ。人生五十年もこれでありませぬ。息子を成人させたらと思つて苦勞して居る。いよ／＼大きくなつたが、此度は嫁の心配である。幸、嫁は貰つたが少も樂にはならぬ。孫は出来る、世話もいる、何時まで経つても樂はない。風呂へ行くと、よく年寄の方が、澤山の鍵をガチャ／＼させながら腰にむすびつけて居るのを見ますが、確かに悲哀でありますナ。なか／＼鍵は渡されないのであります。渡さないからまだ宜いのです。渡したら最後、小遣錢には不足を感じます。隣の人にも相手になつてはくれぬ。内外共に邪魔物扱ひをするのであります。老人も此の時に當つて、

「恁な筈ではなかつた」

「こんなつまらぬ筈ではなかつたが」

といふ不平は起ります。これが世の中の實際である、眞實の相であります。既に實際の問題である以上、私共はこれを逃げず、この問題の中に在つて活る道を見付けねばならぬ。これを見付けることは自分としての大仕事であります。

私共はなぜ自分の心のありたけを、さらけ出さないのか？ 堅く閉ぢて、誰れも入れずに、隠して置きながら、人は自分の心を知つてくれぬ。了解してくれぬと云つて居るのであります。これほど矛盾したことはない。諸君は諸君の本音をお出しなさい。本音さへ出したら、渡る世間に鬼はありません。必ず本音の涙をそぐ人はあるのであります。それを出さないのは、自分に弱みがあるからである。そこで淋しいのであります。苦しいのであります。成程親もあれば兄弟もある、友達もあれば多くの人達も居る。大變賑やかであるが、自分の内面の生活は淋しい荒野の一人旅であります。この淋しさは、一人居るからとか、親に別れたからとか、夫に死に別れたからとか云々やうな寂寞とは譯が違ふ。假令それらの人々は揃つて

居つても、我が孤獨の悲哀はなくならないのであります。こゝに於て世間の多くの人は、或は酒に或は女に或は活動寫眞に、いろ／＼とゴマカスのであります。しかしゴマカシは、到底駄目であります。私共は永久にゴマカスことは出来ません。而して信仰とは、この根本の寂寥、本當の淋しい心を賑やかにする所のものであります。

七 やむにやまれず開く花

他力の信仰は、この吾が胸の門を堅く閉ぢて、淋しく泣いて居る私を憐れみ、我々の身の中、心の中まで深く入り込んで、無始以來の我々の暗を晴らして下さる佛の涙に洗はるゝことであります。吾々はこの親心の慈愛の天地より外に、吾々の生き得る天地はないのであります。自分を磨くことも出来ぬ私、不平より外にない私を、抱いて暖めて下さる佛のお慈悲の世界より外に、吾々の生きる世間は無い

のであります。花の蕾も、春の陽氣と内から送る肥料とに依つて、止むに止まれず開きます。内からと外からの挟み打ちによつて、止むに止まれず、外に發するものが花であります。日光の光によつて、酔い、苦い果實も甘くなる。醜い毛虫も蝶となる。佛の光明は吾等を外から暖めて下されます。光明の縁とは世の中の事實に觸れることである。名號の内薫は私共を内から養つて下さいます。「汝一心正念にして直ちに來れ、我れよく汝を護らん」といふ佛の呼び聲が、私共の胸のドン底にひびく時、光明と名號の挟み打ちによつて、やむにやまれず開くのが信心の花であります。こゝに吾々の生活はあるのであります。

諸君、諸君がやつて居る仕事に不平があるなら、宜しく捨て給へ、嫌なら止め給へ、仕事は他にいくらもある。處がナカ／＼止められぬ、捨てられぬ。この捨てられぬ處、やめられぬ處に深い意味があります。仕事は各與へられた天職であります。

す。これ以外にお互の命の捨て處はありません。

或る人が、米國の豆を罐詰にして居る會社を參觀した時、一人の女工が如何にも熱心に、自分の二本の指を以て屑豆をより分けて居つた。そこで

「あなたは随分御熱心によつて居られますなア」

と側から云ふと、その女工は次のやうに云つた。

「妾の仕事はこの屑豆をより分けることです。もしも妾が假令一粒の屑豆でも、誤つて拾ふことをせなかつたならば、この會社全體の名譽に拘はります。妾のこの二本の指は、會社の信用を支配して居るのであります」

と云つたさうである。この女工の生活は實は意味ある生活である。信仰と生活とが一致して居るのであります。よし二十歳で死なうが、三十歳で死なうが、實に意味ある生活をした人と云はねばならぬ。

一六 自己の心

外に出れば敵七人……若き娘に對する教訓……西郷南洲の大乗精神……すべての問題は自分の心……再び大乘佛教に就て

一 外に出れば敵七人

あの維新の當時、江戸城開渡しの問題を起した時、勝海舟と西郷南洲との話があります。勝海舟が南洲に

「私の立場にもなつて下さい」

と言はれたさうであります。此の事實は何うか知らぬが面白さを感じしめます。南洲の心が寛大でよく人の心を汲んでやつたからあの大事が好く解決を見たのでせう、家庭に於いても同様であります。

「男は外に出れば敵七人」

とか人の言ふた様に、夫が外から歸つて来た時にはいろ／＼に疲れてゐるものです。又時には傷ついた心を抱いて歸宅する事もあります。其の時には唯可愛い、妻や子のやさしい目指をどんなに欲するものでせう。然し妻は何事も知らないで、夫の心になると云ふことなく、不平を訴へたり、歸宅時間の遅いのを詰つたりします。其處に夫と妻との感情の納め入れない所が生じて夫は妻に、妻は夫に、理解を缺くのであります。

二 若き娘に對する教訓

此處に釋尊が若い娘に教誡なされた御言葉を思ひ出します。或る町で、長者の娘が結婚をすることになりました。長者は祝儀の席に釋尊を招待して、

「嫁に對する何かの御祝ひの言葉を頂き度う」

と願つた。其處で釋尊は其の娘に對して五ヶ條よりなる教訓の言葉を垂れなされた。

「一に嫁となるものは姑を尙べ、夜は姑より遅く寝ねよ。二には夫の敬ふ長者や出家を敬へ。三には夫の仕事に理解を持て。四には夫の召使ひ人、夫の仕事を援助する人々の嗜好物を知り、又何かにつけて心細かくして世話を焼いてやれ。五に夫の收入を守り無駄費ひをするな」

と申されたのです。實に行きとどいた教訓であつて妻として此丈が完全に行つて行けるなら、理想的の主婦といふことが出来やう。然し夫にあつても同様であります。妻が病氣を得て床についてゐるとき、其の心持ちを汲まないで自分の不自由の所から、がみ／＼言ふ其處で相方は喧嘩を生じいさかひを産むのも無理からぬことであります。彼様な事は家庭で常に見るところの事で親子友人の間柄に在つても、同様であります。つまり共にこれ凡夫のみてふ自覺がないために他人に對して人間

らしい同情が湧いて來ないので。其處に理解と同情とが眞に要求されます。此の二つが家庭、引いては社會に於ける最も必要なものでありませう。

私共が自己反省を缺くと何時の間にか高慢になり濟ましてゐます。高慢や我執に補はれる様になると其の者の未來は塞がれて仕舞つたも同然でせう。人が高上りしてゐる時には善い方面が見えなくなつて自分、引いては社會までが暗くなつて來るものです。泥中に坐して光を仰ぐ時、此の凡夫の心の中に美しい佛陀の光が射し込んで來るのを覺へるでせう。

三 西郷南洲の大乗精神

今年(こんねん)は西郷南洲(さいかうなんしゅう)死して五十年(ごじゅうねん)に當る(あた)るそ(そ)うで新聞(しんぶん)や雑誌(ざっし)に故人(こじん)の事蹟(じせき)や消息(せうそく)を色々(いろく)の人が書いて(か)ゐますが、其(そ)の中(うち)二三(二三)を私(わたくし)は讀んで(よ)大いに感動(かんどう)を受けました。南洲(なんしゅう)は一生(しやうせい)涯(がい)獨身(どくしん)で家庭(かてい)を作ることなく、唯奉公(たいほうこう)の精神(せいしん)に燃えて(も)ゐられたのです。而し

てあの大きな體の中に無我の大精神の輝いてゐたことが明かだ此の事實によりて私
が日常我が身の事許を考へてゐる様で實際はづかしい思ひを起しこました。

生活は自分が生きるためのもので、他人の厄介にならぬ様にして行くのは正しい
事ではあらうが、然しこの事が知らず知らずの中に今日より明日の幸福を願ひ、自
分や家族の中に幸福の彌増さんことを希ふ時、何時の間にか利己的となつて行く
のを深く恐れるのであります。近來、大乘 小乗 と言ふ事を考へてゐますが、南洲
が徹底的に自己を投げ捨て、唯奉公の精神に燃えてゐられたのは眞の大乘精神と
云ふべく、其れは私への佛陀の光であつて、大いに發憤を起させられた事を深く
感謝してゐます。時代も過ぎた事だから、南洲の事蹟や消息の今に傳へられるもの
が果して事實かは決定する事の出来ないまでも其處に流れてゐる精神丈は動かす事
の出来ぬものでせう。引續いて私 は近頃有難い經驗に接したのです。それは私
の子供が今年五つになつたので幼稚園に入れ度く思つてゐました。所が期日があ

れて正式の幼稚園に入れる事が出来なくなりました。そこで色々人にも聞いた
り求めた所が近所の浄土宗の寺院内に托兒所がありました。早速其處に行つて内容
を聞いて見ると、設備らしいものは少いが、一家族を揚て、私財を投じて經營の任
に當つてゐるそす。近頃は其の經營のために可成り大きな負債も生じてゐるそ
うです。色々相談向きの事は父兄や家庭次第で、遠い會社などに通勤する家庭なれ
ば朝は六時からでも子供を預かり、日曜日丈が忙がしい家庭なら、その日丈世話を
する事にして、月謝なども幾らと定める事なく都合のついた時に收め、又托兒所專
任の醫師を置いて預かつてゐる子供の衛生に注意して下さるなど、今の世に餘り聞
かぬ美はしい事業が都の隅で人からも知られないで續けて行かれるのを知つて、此
れが眞の大乘精神の發露であるのかと非常に感謝をしてゐます。

四 すべての問題は自分の心

再び返つて總ては私共の心であつて、其の心の持ち様で、人生が生きて來たり死んだりする事を述べませう。總ての問題は自己の心によつて決定されるのです。其處に日常の仕事が定まり佛陀の光が射して人生に愛と平和と敬愛の念を仰ぐことが出來ます。此の事が現在の境界を其のまゝ淨土と變へるのであります。釋尊は家庭的には恵まれなかつた。生れて一週間経たない中に生みの母を失ひて、少青年時代は物質的には恵まれた生活を送られたが、晩年に到りては悲惨なものになつてゐた。それは當時ビルタカと稱する一暴君のために釋尊の一族が全部殺されたのです。然し、すべてを捨て釋尊には唯、不動の心あるのみで、世界の人類を救濟する大なる希望に燃えて居られたのであります。而れば其の不動の心が流れ／＼して三千年幾多の魂を救ひ、東洋の大文化史を作り上げたのである。親鸞聖人にも同様でせう。晩年に於けるあの慘ましい生活の中から、

「如來大悲の恩徳は、身を粉にしても報ずべし、師主智識の恩徳も、骨をくださて

謝すべし」

といふ「和讃」を物され、唯、如來の光を讚美されたのであつた。此の様に家庭や社會の嫌な問題も眞に自己を見つめ、自己に目覺めて行く人には何等の價値もなく、かへつて彼様な人に其れ等の困惑が反射して眞實の天地に入らしめる手段と變じて來るものです。而して何人をして此の自己を眞に知り、目覺めて行く自分への理解と同情とが家庭や社會をより住みよきものにする大なる力を持つものであります。

五 再び大乘佛教に就て

再び大乘について述べたく思ひます。小乗佛教と異なり、大乘の佛教は大なる特徴として淨土思想を有つものであります。其の淨土思想に二三あります。一は私共の信仰する西方の淨土であります。人生に對して阿彌陀の世界を憧れるのであり

ます。二には東方に在る阿閼佛の妙喜世界であります。三には「維摩經」の中にも説かれてある様に、此の短い人生を一つの淨土と見る事があります。舍利弗尊者が或る時釋尊に向つて、

「他の佛の世界はまことと美しく結構であるのに、何故に貴殿の世界は汚ないのでせう」

と申し上げた。所が何處からか一天女が舍利弗の前に現れて、

「あなたは未だ見る眼がないので汚れた世に見えるのでせう」

と言ふた。舍利弗は其の天女の言葉に愧入つてゐた時、釋尊はその力で奇麗な世界を現しなされたと言ふ事でもあります。又、其の外に彌勒の淨土も、次いでに言はなくてはなりません。此の世界は五十六億七千萬年の未來に於て、此の世界が淨土に變ると言ふのである。是の如き淨土を木村博士は觀照の淨土と稱してゐられます。少し餘談に入るが、藝術を解する人には普通並の人と異なり、觀照の世界がず

つと展開して來るものであります。即ち普通の人の氣の付かぬ所に觀照の世界を見

出だすのであります。例へば芭蕉が

「古池や蛙とび込む水の音」

と詠んだ如く、藝術の世界が開けて來るに従つて觀照の世界も之に伴なひ展開して來るものであります。私は異安心者と言はれるかも知れぬが、眞宗の信者であつても、此の世に生きてゐながら極樂世界に生れないまでも、其の次の間に起居さして頂いてゐると云ふ心持ちを抱き得るものであります。祖聖も「和讃」に「超世の悲願聞きしより、我等は生死の凡夫かは、有漏の穢身は變らねど、心は淨土に住み遊ぶ」

と言ふてゐられます。此處に安泰な平和な生活を送る事が出来るのです。此れが大乗佛敎の敎へる觀照の世界であります。

一七 無 我

自由の意義……「我」「無我」の問答……不増不減……因果を超越すること

一 自由の意義

そもく無我の「我」といふ文字はどんな意味であるかと云へば、

「常一主宰」

である、常とは常住で、昨日の私と今日の私とは違つて居らぬといふのである。一とは獨立で、泣く我れも怒る我れも笑ふ我れも一つである。主宰といふのは主人公となつてもろくの審きをするといふので、これには自由の意義がある。

すると無我とは、第一自由といふものが無いといふことになる、すべてのものは因縁によつて表れたもので、吾々が迷つたり悟つたりするのは、みな因縁であると

いふのであります。だから佛教では、すべてを冷靜に考へて、因縁といふことを見るのであります。自分と云ふものは因縁によつて出来たものである。

而して業といふことも、こゝから出て來るので、善惡の業といふものが因となり縁となつて吾々は苦んで居るのである。で、

「我」

といふことを、自由といふことにすると、自由のない、運命といふことが無我であると云ひ得る。尤も普通、運命といつて居るのは、外から來ることで、今いふ運命とは少し違ふのであるが、やはり一種の運命と云つてよい、それで歎異鈔の中には、

「兔の毛、羊の毛のさきにある塵ばかりも、つくるつみの宿業にあらずといふことなし」

とあります。これは非常に深い運命といふ事を見て居られるのであります。吾々

の苦樂といふものはみな過去の業の報ひである。苦樂が宿業の報であるばかりでなく、苦樂の本たる業そのものも宿業であるとせられてある。宿業によつて、私共は、どんな悪をするかも知れぬといふのであります。

二 「我」「無我」の問答

人間はすべて善いことをしたいと思つて居るがナカ／＼出来ない、思ふまじきことを思ふのであります。しかし此等はみな因縁である、宿業である。斯う云はれると吾々は考へさせられるのであります、實際、どんな人でも、思ふまじきことを、思はず居ることは出来ないであります。

「さるべき業縁のもよほせば、いかなる振舞ひもすべし」

で、思ふまいとしても、思はずには居れぬ。どうすることも出来ないのであります。だから人間は決して大きなことは云へないのであります。どんな事を思ふか

知れぬ、どんなことをするかも知れないのであります。

「兎の毛、羊の毛のさきにある塵ばかりも、造る罪の宿業にあらざといふことな

し」

吾々はみな業報に動かされて居るのであります。自由とは我慢の産物で、吾々には全く何等の自由はないのであります。

かく無我とは一方に於て、因縁といふことを知らせ、自由でないといふことを知らせると共に、また一方に於てはそれと反對のことを考へさせられるのであります。それは、釋尊が家を外て外道を訪ねられて、いろ／＼問答をされた。その問答はいつも「我」「無我」の問答であつた。その時、外道は多く「我」を説いて、吾々は無明煩惱のために「我」が縛られて居る、だからこの「我」を縛る無明煩惱から救ひ出さねはならぬといふのであります。ところが釋尊はそうは云はれぬ。「我」といふものがあれば、本當に解脱することは出来ない、無我でなくてはならぬと云はれ

る。これは何ぞであるかと云へば、こゝに「我」があれば、その「我」と同じいろいろのものがある。するとそのいろいろのものに縛られるのは當り前である。だから「我」の苦しむといふことは、「我」自らの責任ではなくて、いろいろのものの責任である。我れの困るのは我れ自らの責任でなく社會の制度が悪いのであるといふことになる。それで「有我」は、自分に責任を感じないことでもあります。「有我」は物に縛られた考へであります。然るに「無我」であれば自身に自から責任を見ることになる。業煩惱によつて苦を受けること全部が、自分の責任であるといふことになる。

釋尊の出發點は、

「汝自身を知れ」

といふやうな近いことでもなければ、また

「宇宙とは何ぞや」

といふやうな遠いことでもない。

「人生は苦なり」

といふ現實の問題であります。而してこの苦の原因を外に求めず内に求めて、業煩惱によるとせられた。こゝに釋尊の無我はありますのであります。「我」は利害打算の考へであります。都合のよいことを考へるのであります。都合のよいことを考へるのでありますから、物の真相が分からない。釋尊は無我と考へて、物の真相を見られた。そして苦の原因たる業煩惱は唯一心で、心一つである。だから業煩惱は全部自分の責任であります。で無我といふことは、自分に全責任を感じることでありますからこれ即ち獨立自由の人であります。

しからは吾々はすべて業煩惱に引きづられて行くのであるか？ 闇から闇へ引きづられて行くのであるか？ 或はまた自分の思ふ通り自由にやつて行くのであるか？ ？ これを常識的に考へると、全く自由だとも考へられず、また全く不自由だとも

思はれない、自由な處もあり不自由な處もあるやうだ。そして自由に行ふことには責任があるが、自由に行かない事には責任はない筈である、しかし實際私共は、さらは思はれないのであります。自分の思ふ通りにやつた事は勿論、やむを得ずやつた事にも責任を感じるのであります。で、聖人は

「よき心の起るも善業のもよほす故なり、悪事の思はれせらるゝも悪業のはからふ故なり」

と。すべて業報だとして、しかも本願の不思議に向はれたのであります。

三 不 増 不 減

釋尊は業煩惱を對治して悟りを開かれたのであるが、眞實私共はそれを斷ずることは出来ないであります。しかも業煩惱は到底斷ずることは出来ないが、此等は宿業であるといふことを見付けた時、その時私共は救はれるのであります。見

付けるといふことが、業煩惱から救はれたことである。業煩惱から脱れることの出來ない自己を發見した時、自分は罪から救はれたのであります。

お經に恁んな話があります。それは、佛が衆生を濟度して段々と濟度されると最後に濟度すべき衆生がなくなる。すると最後の一人だけは濟度すべき人が無いのであるから、佛になることは出来ないだらう。その答に

「無限の衆生界を濟度するに、佛も衆生も共に不増不減である。恰も無限の空間に於て鳥あつて西から東に向つて走る場合、西は漸々遠くなつて、東が近くなるといふことはない。しかも鳥が走つたといふ事は事實であるやうなものだ」

とあります。全體

「無限」

といふやうなことは吾々には考へられないのであります。分らないことではありません。兎も角、不増不減と説いてあります。

で、實際よく考へて見ると、私自身の業煩惱は少も減らないのであります。善導大師は、

「決定シテ深ク自身ハ現ニ是レ罪惡生死ノ凡夫、曠劫ヨリ已來、常ニ没シ常ニ流轉シテ出離ノ縁アルコト無シト信ズ。決定シテ深ク彼ノ阿彌陀佛ノ四十八願、衆生ヲ攝受シテ、疑ナク慮ナク、彼ノ願力ニ乗ジテ定ンデ往生ヲ得ト信ズ」と云つて居らるゝ。二種の深信は一つであつて

「私は罪深いものでありますが、阿彌陀如來はかゝる者を御助け下さるゝ」といふ領解であるなら、これを簡單にして

「如來は私を助けて下さるゝ」と略してもよい筈だ。しかしこの二種の深信は永久に平行するものであります。二者相離れないのであります。で、もし、機の深信を衆生とし、法の深信を佛とするならば、佛も衆生も不増不減であります。故に吾々が苦から救はれるといふのは

苦に従ふことでなくてはならぬ。

百丈 禪師でありましたか、一日、禪師の處へ一僧が來て、
「私は野狐であります。私が曾て提唱をして居りました時、佛教とは何ぞやといふ問ひを受けた、その時、私は因果を超越することだと云つてやつた、ところがこれが間違つて居つたので五百生の間、狐になつて仕舞ひました」といふ。禪師は、
「因果にくらからず」と申されたら、その狐は悟つた、といふ話があります。

四 因果を超越すること

これも、因果に従ふといふことが因果におちず、因果を超越する事であります。私共が業煩惱から脱れようゝとするのは、これは一つの執着であります。聞か

ら脱れるといふこと、闇に従ふといふこと、は一つであります。この點に於て佛
教の功能は少ない、と云つてよい。維摩經の中に羅喉羅が出家の功德を説くのに
對して、維摩は、

「功德を説くことは不可ぬ、功德のないのが出家ぢやないか」

と云つたといふ話がある。これは餘程面白い話である。佛敎は實際、功能は無い
のであります。敢て功能を申しますれば、吾々をしてますます苦しませる功能を有
つて居ると云つてよい。吾々に自覺させる事は、苦を増すことである、知らずにや
ることには罪はない。犬や猫に五逆罪はない、知つてやる處に罪はある。罪あるこ
とを知るのではない、知る處に罪はあります。佛敎に於て自覺させるのは
罪惡を發見させるのであります。而もこの闇を見、苦を見てこれから濫りに脱せん
とせず、これに従ふといふ處に、前に申した無我の二方面はあります、闇
に従ふところ、苦に従ふ處に力があります。

一八 眞實の幸福

小我の快樂……無我の快樂……大我の快樂

一 小我の快樂

眞實なる幸福は如何なるものであるかを論ずるには、まづその幸福を形造る快樂
に就て御話せねばならぬ。

快樂を今三通りに分けていふと能くわかる。

第一が小我の快樂。小我といふのは此の肉體の我れで、如何な六尺の大男でも天
地の無窮廣大に比すれば實に蒼海の一粟であります。また時間的から云つても人生
七十古來稀なりで七十までも生きて居れば長生きしたといふ。これを天地の悠久に
比ぶればこれまた論ずるに足らぬ程の小である。蘇東坡は吾々の生活を蜉蝣のそれ

に比して居ります。實に吾々は空間的から云つても時間的から云つても極小なものと云はねばならぬ。これを小我といふのであります。

この小我の快樂は何を以て快樂として居るかと言へば、甘いものが食ひたい、美しい衣服が着たい。立派な大きな家に住みたいといふのである。これは小我の肉體的、物質的の快樂であるが、名譽だとか權力だとか云ふのはその精神的の快樂であります。しかも精神的の快樂に於て自分以外五人なり十人なりの一同の名譽權力であれば面白くない。自分唯一人の名譽、權力を欲してこれを樂むのであるから、どうしても小我の樂みと言はねばならぬ。

此等の小我の快樂を得る爲めに、こゝに金を得ようと努力します。金さへあれば物質的の快樂は勿論、精神的の快樂も得られるものと思つてゐる。ところが、いくら金が出来ても思ふたやうな快樂は決して得られない、何ぜかと云へば小我の快樂は苦痛を離れないからであります。樂を得るには必ず苦が従ふて居るのであります

卑近な例で云へば諸君が毎日毎日御馳走を食つて居れば、御馳走も甘くない、平生粗末なものを食つて居るから、時々々の御馳走がうまいやうなものである。それで金持ちには御馳走の味は分らぬ。ある金持の話に、

「わしには何處へ行つても御馳走を食はしてくれない」

と不平を云ふたといふ。またある金持ちに

「あなたは何が御好きですか」

と云つたら、

「何が好きかと云はれても、ソラ時々違ふが、まあ今分ではシラ貝に鹽をつけて食ふのが一番だ」

と云つたといふことがある。粗末なものがなければ御馳走の味が分らぬと同じく苦がなければ樂はないのであります。ストープにあたつて

「これはよい」

と云ふのは、その前に寒さの苦みを經驗して居らねばならぬ。それから精神的の快樂と云つた名譽だとか權力だとかいふのも亦さうである。生れ落ちてから人に尊敬され、元から權力あるといふ人達は少も愉快を感じないのであります。今までは少の名譽も權力もなかつた者が、一朝名譽を得、權力を得た時、そこに初めて愉快がある。しかしそれもいつまでもそれを得て、名譽、權力に馴るとまた少しも愉快を感じないやうになる。で苦と樂とは決して離れるものでないといふ事はよくお分りになつたらうと思ふ。それで金持ちも貧乏人も五分の苦あると共に五分の樂がある。唯違ふのは乞食が麥飯でも腹一杯食へば充分であるに反し、金持ちは御馳走を食つても有難くない。より以上のものがあつて始めて満足するといふ處が違ふだけである。故に金持ちと貧乏人は物質的に違ふだけで、主觀的には全く同じことであります。で主觀的の立場から見ると金持ちも乞食も平等である。世人が金さへあれば幸福であらう、樂みが得られるであらうと思ふのは大きな誤りであります。

或る成金に向つて或る代議士が、

「あなた程、澤山金があればサツ樂みが多い事でありせう」

と聞いた。するとその成金は

「イヤ決して樂い事はない、金は拵らへる時が樂みで、拵らへて仕まへば少も愉快を感じないものだ」

と云つた。代議士はなほ進んで

「それほど金に値打が無いのなら、私に呉れたらどうです」といふと、

「それは御免だ、此の金は樂みながら溜たもので、云はゞ樂みの糟だ、樂みの糟を上げるといふ事は失禮になる。あなたも金のないのが樂みを造る本だから、セツと金と金を溜なさい」

と云つたといふ話がある。で金があれば樂みだと思ふのは大きな誤りであるといふ

ふ事を思はねばならぬ。或る人が、

「幸福は蜃氣樓の如し」

と云つたが、これはつまり幸福はどうしても捕へる事が出来ないといふ意味であります。で物質的の快樂は生涯得られるものでない。恁んな理想は一日も早く捨てねばならぬ。社會國家といふ團體から云つても、もし國民全體がかゝる小我の快樂を理想とするやうになれば、實に社會の安寧、國家の幸福を害することになる、何となれば右申す通り、欲望には限りがないが、その欲望を充たす材料には限りがあるからである。茲に於て不平となり失望となり竟に社會は亂れ國家は不安動搖のものとなるのであります。

二 無我の快樂

第二が無我の快樂。これは小我を無くした時に得られる快樂であります。小我を

忘れ、自分と他人との障壁を無くした時、茲に微妙の快樂を得る事が出来る。これは即ち美術、文藝の美的快樂である。紅葉を觀、月を觀、花を觀、繪畫を見、芝居を見、小説や詩を讀み、音樂を聞いた時は實に微妙な快樂があります。これは小我を忘れた處に初めて得られるものであります。花を觀た時、花と自分とが對立して花は花、自分は自分と分れて居る時は快樂ではない。所謂花に見とれる時に眞に快樂がある。

月やわれわれや月かもわかぬまで

心のすめる秋の夜の月

天上の月が我れであるか、地上の我れが月であるかといふ無我の境に於て無我の快樂は得られるのであります。欲の深い人は風流氣がない。

或る風流人が欲の深い人と雪見に行つた、

「どうだアノ雪景色は」

と感嘆すると、其の欲深い人は、

「いやどうも残念だ」

と云ふ、

「何が残念だ」

と聞くと、

「もしこれが砂糖であつたら尙更愉快であらう」

と云つたといふ話がある。小我を忘れなければ楽しみは得られるものではない。

此の無我の快樂は高尚であつて弊害はないが、永續するといふ事はない、つまり

いつもこの快樂を味ふといふ事は出来ない。これで私共は満足する事は出来ぬ。

そこで

三 大我の快樂

第三に大我の快樂といふ事を述べねばならぬ、大我といふのはこの五尺の體のことではない。モット大きな體であります、勿論大きいと云つてもいろ／＼の程度がある。今云ふ大我とは我他彼此の對立差別のない我であります。一例を擧げて申しますれば親子の間に於けるやうな「我」であります。つまり隔て心のない我である一町一村一社會の者が共同して働くと言ふも大我である。國家人道の爲めに盡さんとするも大我である。この小我の存在を忘れ、自己を犠牲にした心から發する所の行動には自から快樂を生ずるものであります。この快樂こそ絶對の快樂であると申したい。

ところが斯く申しますと或る人は、

「今日自分だけの事でも困つて居るのに他人の事を先にせよとか自己を犠牲にせよとか云ふのは無理な話ぢや」

と云はるゝかも知れぬ。しかし決して無理な注文ではない、法華經の中に

「諸の苦のよる所は貪欲を本とす」

とあります。貪欲とは利己主義のことである、佛教で慾は悪いといふが、この利己的小我的の快樂に走る人は悪いのであります。また涅槃經に、

「慈はこれ涅槃、涅槃はこれ最安樂の處」

とあります、涅槃は最安樂の處、眞實なる幸福であります、慈は涅槃、慈といふのは大我のことです。親切な心持ちは即ち涅槃であり眞實な幸福であるといふのであります。

「君子は平かにして蕩々たり、小人は永へに靜々たり」

といふ語もあり、君子はノンビリとして居る。そこで君子のことを大人とも云ふ「その大體を養ふを大人と云ひ、小體を養ふを小人と云ふ」

親子、一家、一町、一村、一國といふ風に大きなものを養ふのが大人である、小さい五尺の體を養ひ、利己主義で生活して居るものを小人と云ふ、小人は靜々とし

て心配さうな顔をして居るといふのであります。儒教に

「君子は樂む」

ともあります。道は近きにありで、この事は近い親子の間によく表れて居ります。親が子を育てるといふ事程ツマラヌ事はない、打算的に考へたらトテモ子を育てる事は出来ない。しかし親は慈のために自己の苦を少も厭はない、子供を育て、居るといふ事が眞の幸福になつて居る。愉快此の上もないのであります。

ある寺の椽で一人のお婆さんが孫の守をして居つた。そこへ一人の書生がやつて来て、

「お婆さん、僕は恁んな事を聞いた、子供に甘いものを食べさせると親の體が肥え

ると、これは本當だらうか」

と尋ねた。すると婆さんが、

りませんが、甘いものがあると子供に食べさせてやる方が親としては甘いものです」

と答へたさうです。これが即ち大我の快樂である、眞實の幸福は小我を忘れ、自己を捨てた時に始めて得らるゝ快樂を申すのであります。つまり自己の苦樂を眼中に置かない處に成立する快樂であります。これを涅槃の樂とも大我の樂とも申すのであります。維摩經に

「心淨なれば國土淨なり」

とある。淨とは彼此の間に障壁のないことである。彼此の間に障壁を築かなければ慈悲の心が生ずる。この慈悲心を以て働けば茲に眞實の幸福は得られるのであります。

一九 如斯修養

一切衆生悉有佛性……一滴の水も美景を造る……一日の事は朝にあり

一 一切衆生悉有佛性

今年ことしは虎とらの年としで

「猛虎まうこ一聲せいしん山月さんげつ高たかし」

と古人こじんが云いつてゐます通りたけしい、それで虎とらの様やうな勢いきほひで東京とうきやうの復興ふくこうも進すすんで行ゆくと思おもふ、虎とらにも猛たけしいのと柔弱じやうじやくなのとがあるが、獅子しし等なぞと共に猛獸まうじゆとして我々われら佛敎ぶつぎやうでは之これを制せいする可べきものとされて居ゐる。

忍耐にんたいするとは誰たれでもが云いふことである、而しかかんにんすることは口くちには易やすいが、

なか／＼行ひがたいもので、織田信長が、

「啼かすば殺せほとゝぎす」

といつたのに、家康公が、

「啼くまでまたうほとゝぎす」

といつたことは公の忍耐力がいかにあつたかを知ることが出来る。この調子で家康公が天下を取り連綿として徳川家が榮へたのだと思ふ。實業家でも、政治家でもその通り、かんにんがもとで、守つて行けばさつと成功するのである。そうして人間でも獸などでも凡て佛性と云ふものを以つて居る。

佛教では涅槃經に、

「一切衆生悉有佛性」

とあり、かんにん波羅道と云つて、狗子佛性、犬猫にも佛性があると云つてゐる勿論虎にもあつて、之れを發現させることが大切である。佛性とはお互ひの本性で

ある。虎でも佛性のある虎は、感化を興へると佛の魂が發現すると、人間や他の動物をかむ、食物に害を加へるといふことがなくなる。

今から十五年前私が朝鮮を巡回した時、黄州に虎が出て人畜や食物を荒して困る、どうしたらよからうかと道廳官が心配して防ぐ法はないかと云つたとき、支那に名僧が居て凡ての物を感化すると云ふので、わざ／＼支那から向へたのみました。それで僧侶は虎の穴に入つて南無阿彌陀佛の經本をよんでくらし居たので遂には虎が手をうてば出入するやうに柔和になつた。之は佛性は佛の力によつて發現させたので、法によつて感化されたといふ事蹟のあつたことを聞いたことがある。

二 一滴の水も美景を造る

世界十七億の人間は皆性を以つて居る、それが或る因縁に依つて發現するので、今日の教育も其通り本や新聞、社會によつてそれが發現されるのである。草花でも

咲かせる様に培養すれば美しい花を開くので、凡て必ず發する時があるものである。佛性を發現させれば六十萬人の教悔師も、刑務所も看視人も不用、罪人の出る事がないのである。然るに今日の状態は殺人強盜、放火とあらゆる罪科を犯すものがある。萬物の靈長である可き人間に於てかやうな有様である故、もろくの人は心しなればならぬので切角以つてゐた佛性も名玉もやみに失はれてしまふ。

一切衆生悉有佛性の佛の教へかと思つて、立派な人間になるのは教育、社會、宗教の感化力で殊に宗教による所が多い。日本全國では六萬ヶ寺の多數に上つて、精神を感化して導くところである。人間も務めれば佛の境に進むことが出来る。悉達太子でも、大哲學者でも、東西兩洋を通じて皆修養によつて、佛性を生現し、名玉を磨き上げたに由るのである。修養は近い日々のことから修養すべきで、各の道を正しい道をたどれば宜しい。

唱ふれば此處に居ながら極樂の

少女の數に入るぞうれしき

商無阿彌陀佛を唱へてゐれば、此の身のまゝでも極樂に入る様に崇高な、そして愉快な氣持になると古人が歌つて居る。發現は一時に出づるものでない、君に忠、親に孝行で、皆人の爲めになる様働くのが一つの修養で、近い處から遠きに及ぶことで、それにはどうしたらよいかと云へば、毎日少しづつ、修養をつむ、今年の御勅題河水清でも、大海大河でも、一滴の水が集つて美景を造る、大山でも小さい塵がつもつて遂には大山をなすので、わづかな修養でも段々と立派な修養の出來た人となることが出来るのである。

三 一日の事は朝にあり

一日の事は朝にあり、一年の事は元旦にあり、修身の如き若きにありといふ。年をとつてから苦勞をせぬ様勉強修養して、成功した人と云はれたいものである。又

人間は慈悲がなければいけない、智仁勇の三と云ふ、智と仁を應用するのが勇で、宗教によつて慈悲を養ひ、教育によつて智を得る、釋尊が右手を上げ左手で下を示してゐるのは、智は向上するから上にあげ下に仁をほどこすので下に向けてゐるのである。神佛は智と慈のかたまりである。

釋尊のお弟子に般持尊者と云ふ弟子があつて、ほうきの使ひ方を三年かゝつて覺えたと云ふ、そしてその時の覺えの爲めになへた言葉がお經の中に三千年も残つてゐる。

かくの如く修養すれば得度することが出来る、修養を分折することはむづかしいから、その一つ一つをつとめてゆけばよいのである、之が新春にあたつて皆様に望む處である。

二〇 名聲を保つ道

六方禮經……四ツの戒め

一 六方禮經

「佛、王舎城の鷄山中に在す時、長者の子あり、尸迦羅越と名づく、早に起きて頭を嚴り、洗浴して文衣を着し、東に向つて四拜し、南に向つて四拜し、西に向つて四拜し、北に向つて四拜し、地に向つて四拜し、天に向つて四拜す、佛國に入つて分濟逢に之を見て、往て其家に到り之を問ふ、尸迦羅越言く、父在せし時我に六方拜を教ふ、何の應なるを知らず、今父喪亡せり、教て後に於て之に違はざるのみと、佛言はく、父汝に教へて六向拜せしむ、身を以つて拜するにはあらざらん、尸迦羅越、便ち長跪して言く、願くば佛、我が爲めに此の六向拜の意を解け、佛言はく、之を聽いて内心中に着けよ、其れ長者默人有て、能く四戒を持て

犯さざるものは、今世には人の敬する所となり、後世には天上に生ぜん、一には諸ろの群生を殺さず、二には盗まず、三には他人の婦女を愛せざれ、四には妄言兩舌せざれ、心に貪婬恚怒愚痴を欲せば自ら制して聽くこと勿れ、此の四意を制する能はざるものは、惡名日に聞えて月盡る時に光明稍く淡きが如し、能く自ら惡意を制するものは、月の初めて生ずるに、其の光稍く明かにして、十五日盛満時に至るが如し」

昔しお釋迦様がまだ印度の、摩伽阿國の王舎城と云ふ處の、鷄足山の中にお在になりましたところのことでありますが、土地の長者の子で尸迦羅越と云ふ者がありました、その尸迦羅越は必ず毎朝早く起きまして、髪を梳り身を淨め、衣服を改めまして、先づ最初に東に向つて四度禮拜し、亞で南に向つて四度禮拜し、又西に向つて四度禮拜し、北に向つて四度禮拜し、天に向つて四度禮拜し、地に向つて四度禮拜するのを、毎日缺かさず勤めとしてをつたのでありました。或る時のことで

ありましたが、丁度釋尊が其の附近に托鉢にお出になり、此の尸迦羅越の勤行の様子を審に御覽になりました、誠に感心な心掛けの男ではあると思ひになり、態々長者の家にお寄りになりました、尸迦羅越に向ひお尋ねになりますには、
「汝は感心に毎日のやうに六方を拜して居るのを、托鉢の都度見掛くるが、如何なる譯で六方を禮拜するのか、其譯を知つて居て禮拜するのであるか」

とお尋ねになりました。すると其の時尸迦羅越がお答へ申上げますには、
「お尋ねを蒙つて誠に恥かしいことでありますが、是はまだ父が此の世に生きて居りました時から、毎朝必ず斯様に六方を禮拜せよと、教へられて居りましたので、それが如何なる意味で六方を禮拜致しますのか私には分りません、只々亡き父の申付けでありましたものですから之を背くまいと實行してゐる次第であります」

と申上げたのでありました。釋尊は之をお聞きになり、其の父の亡き後までも父

の志を變へず六方を禮拜すると云ふ、殊勝なそして人となりの正しい奥床しい心
情に大層御感心なさいまして、

「汝の父が六方を禮拜せよと教へたのは、唯々身を以つて之を禮拜せよと云ふばかりではない、之には深い意味が籠つて居るのである」

と仰せになりますと、尸迦羅越は世尊の足下に跪いてお願い申しますには、

「私は只々亡くなりました父上の教への通りに、毎朝如何なる譯といふことを知らず、禮拜して居つたのであります、此の六方禮拜に就いてそんな深い意味があると致しましたならば、世尊よ、私のために其の意味をお教へ下さいませうにお願いいたします」

と只管にお願い申上げますと、釋尊は此の孝子の願を諒とせられ、やがて御教訓になりましたのが、即ち有名な六方禮經でありまして、家を齋へ身を修め社會に活動せんとする人達への、感銘の言として服膺すべき經典の一つであります、即ち釋

尊は尸迦羅越に白く、

「大凡世の中にあつて澤山の人から長者と立てらるゝ程のものは、能く次の四つの戒を守つて決して犯てしてはならない、左様する時は現世に於ては善き果報を得て人からは敬はれ、又後の世では天上に生るゝことを得て、果報めでたき身となるのであるから、深く心に感銘して等閑のことに思ふてはならない、即ち其の四つの戒と云ふのは、

一には、諸ろの生物の命を取らないことである。

二には、凡て他人のものを盗むことがあつてはならない。

三には、他人の婦人を愛することをしてはならない。

四には、妄言、兩舌を戒むることである。

此の四つが即ちそれである、之を能く守つて、若し貪りの念が起つたり、姪らな心が徴したり又は怒り腹立ちの心、因果の道理に迷ふて可愛ゆい憎いの愛情に狂ふ

やうな情が起りなば、自ら之を戒めて制し止めなければならぬ。若し此の戒を無視して、斯る不都合な心を制することが出来なかつた時には、悪名は日々に高まつて、恰も晦日に近いお月様の光が次第に薄らいで行くやうに、今まで謳はれた名聲は、次第々と地に墮ちて、遂には社會からも人からも指彈され、生存の無味を嘆つに至るであらう。又能く此の戒めを守り、日々起る妄執悪念を打ち拂ひ善行を精進するものは、新月の次第に光を添えて、遂には満月して其の光が三千大世界に照り渡る如く、社會からも人からも尊敬せられ、其の徳はいよゝゝ積んで不退の眞樂は得られるであらう。」

と四度禮拜することにお因みになり、此の四つの戒めをお説きになつたのであります。

二四つの戒め

此の四つの戒めと云ひますのは、一は不殺生の事であり、二は不偏盜、三は不邪淫、四は不妄語不兩舌であり、前の不殺生、不偷盜、不邪淫の三つは身に就いての戒めであり、四の不妄語不兩舌は、口に就いての戒めであり、妄語と申しますのは人に嘘偽を言ふこと、兩舌は即ち二枚舌であります、甲の人には山に行くと稱し、乙の人には河に行くと云ふやうな、二様の言を使はぬことが即ち不兩舌であります。尙此の外に給語と申しまして何等の利益にもならない。又、役にも立たない戯談を言ふこと、悪口を言ふこと、この二つを合せまして、口に就いての四つの戒めとしてあります。その悪業を犯す本となりますところの、意に就いての三業、即ち貪りの心、嗔恚の心、愚痴の心、此の三つがあります、是を身の三業、口の四業、意の三業と云ひ、佛敎道德の根基とされてあるのであります、在家の人であります、出家をしたものであります、共に守るべき十戒となるのであります、愛には身や口に現はれます悪業の中で、身業の三と口業の中で主要とされて

あります妄語と兩舌をお舉げになり、更に意業の三の制すべきことをお示しなされたのであります。斯くの如く佛教道德の綱目をお舉げになりまして、その道德に順へば善い報ひがあり、之に背けば悪い報ひが免れない、善因善果、惡因惡果の道理を懇切に御示しなされてありますのであります。元來此の六方禮經には六方四拜と云ふことを縁として、御説教をなされてありますので、何事をお説きになるのも必ず四又は六の數字に因んで御示しになつて居ります、是が釋尊の應機接物のみ教へでありまして、一切衆生成佛の彌陀願主の御誓ひは即ち茲にあるのであります。

二 財を整ふる要訣

六つの戒め……第一の戒め……運は運ぶと訓ず……福德圓滿

一 六つの戒め

佛言はく、復六事あり、錢財日に耗減す、

- 一には飲むを喜む。
 - 二には博掩を喜む。
 - 三には早臥晩起を喜む。
 - 四には客を請ずるを喜む、又人に請ぜしめんと欲す。
 - 五には惡知識と相隨ふを喜む。
 - 六には驕慢にして人を輕んず。
- 上頭の四惡を犯し、復た是の六事を行ひ其の善行を妨げば、亦治世を憂へざるを

得ず、錢財日に耗減せん、六方拜するも當に何の益かあるべき」

世尊は既に四戒の犯すべからざるをお示しになり、此の戒を保持することに依つて名聲は保たれ、不退の眞樂を享有出来ると仰せになりました。然して更に又人の錢財を失ひ、家産を傾くるの原因に就て六事の目をお擧げになり、是を確くお戒めになつてあります、即ち

- 一には酒を飲むことを喜ぶ。
- 二には博掩といふて錢財を賭けて勝負事を爲すを喜ぶ。
- 三には夜は早く臥し、朝は晩く起きることを喜ぶ。
- 四には用事も無い客を招くことを好み、亦人をして之を請せしめんとする。
- 五には惡しき友と交はるを喜ぶ。
- 六には驕慢にして人を輕んずる。

二 第一の戒め

前にお説きになりました、四つの戒めを破つたり、今また此の六つの事を行ひます時には、善い事を爲やうといたしましても之を行ふ暇が無く、すべての渡世の上ウラヘに細心の注意が缺けますから、財産は日に月に耗り減して、昨の榮華は權花一朝の夢と化し、即ち困乏の極に陥り路傍に人の見返りを受くることとなり、如何に六方を禮拜するとも何の益もないこととなるのであります。故に此の六つの事は財産を失ふ唯一の原因であつて、貧乏を招く根本となりますから、釋尊は堅く是れをお戒めになつたものであります。

酒を飲むと云ふことは諸種の罪惡を犯す根源でありまして、無益の金錢を亂費して貴重な時間を費すことが夥しい、又そればかりではありません、大酒をいたしました結果は身の健康を害し、人と争ふて名譽を失ふこともあるのであります、

是を第一にお戒めになりました。

三 運は運ぶと訓ず

次には勝負事を好むものは、正業が嫌になり性怠慢となりまして、社會の風教は紊亂し、良習を賊ふことが夥しいのであります。斯る賭け事で勝ちまして金銭を得たといたしましても、理道に儲けた金とは違ひ。決して其の金が身に附くものではないのであります。斯うした賭け事では勝つと云ふことは稀でありまして、多くの場合負ける方が多いのであります。勝つた時には宜しいが負けました場合は一文なしの窮境に陥つて、遂には悪い心を起すやうになり身を誤ることが多いのであります。それでありましてから法律では堅く之を禁じ、假借なく斯う人達は處罰して居るのであります。一體人間が投機心に驅られて事を行ひますと、得て正道を踏み外し勝ちで、知らず識らずの間に惡道へ踏み入る様になり、其の身を誤るに至るのであります。

あります。

又早く寝ることを好んで朝寝をしてをりますと、身を遊惰に持ち崩して、財産を減らせるばかりでなく、その身の健康も害するのであります。昔、四國のある所に、非常な豪農の家が生れた人がありまして、急にその兩親が亡くなりまして、其の家を相続することになつたのでありましたが、此の男は非常に朝寝をすることが好きで、何時も家業を怠り勝ちでありました。處が自分が其の遺産を受けつぎまして後は日々財政が窮乏して行く一方でありまして、昔日の巨萬の富を以て鳴らした豪農も、蠟燭の心が次第々々に細る如くに、財産は衰微して行く一方でありました。格別之れと云ふ濫費をした覚えもないのに、不思議なことではあると思つて居りましたが、猶且朝寝をすることは止めなかつたのであります。すると或日のこと一人の善知識がお出になり、其の男に向つて云ひますには、

「あなたの家の後ろの田のほとりに、此頃毎日のやうに黄色の鳥が来て啼いて居り

其鳥の啼き聲の微妙なることは言語に絶して居ります、この鳥は夜が明けて日光が出づると何れかへ飛んで行つて見る事が出来ません、その鳥を見やうと思へば夜が未だ明けやらぬ曉に於て、ひそかにその附近へ行つて見なければなりません

と申したのであります。これを聞きました豪農の男は、不思議な事に思ひまして好奇心に驅られ、翌朝は朝未だきに起き出で、裏の田地のほとりに来て見ますと時恰も秋の收穫時でありましたので、數多の使用人等はその豪農の田に出来た稻を思ひ思ひに刈り取つて、これを主家の藏に運ぶことはしないで、己が家にと運んで居つたのであります。さすが朝寢の好きな男も、この有様を見て、自家の衰頹する原因はこゝにありと悟りまして、よく／＼家事のことに就て注意してみますと、自分が朝寢をしてゐて知らない間に澤山の雇人等は主人の目を偷み、手に着け足に着け主家のものを自宅におくり、今まで味方とばかり思つてゐた雇人等は、皆主家に

巢喰ふ白蟻であつたのであります、爰に於てその人は今まで朝寢をした無明を悔い朝は早くより起き出で、奉公人に卒先して家業にいそしむやうになりましたのでその家は日ならずして倍舊の盛運を迎へたと云ふことであります。人間の運と申しますのは之れを運ぶと訓じまして、朝は早くより夜は晩くまで自分の身體を運ぶ、そこに財を整へ家を整ふる本はあるのであります。釋尊の朝寢早寢をお戒になつたのも理あることゝ知られませう。

四 福德圓滿

又徒らに客を招いて今日は歌舞伎座に行く、明日は帝劇と、酒地管絃の歡樂にのみ耽つてをりますと、驕るものは久しからずの譬への如く、身を亡ぼし財を破るの原因となるのであります。又或は飲み友達、遊び友達、甚だしになりますと借金友達などと云ふのもありますが、斯う云ふ悪い友達と交はりますと、何時の間にか

自分もその惡に泌み込んで祖先傳來の財貨を失ふこととなりまますので、このことも堅くお戒しめになり、又驕慢にして人を輕んじ、自分ばかり偉い者のやうに考へて人を目の下に見るやうな心得違ひの者は、人からは憎まれ遂には思はぬ損耗を招くこととなるのでありますから、驕ぶらず慢らず、身を謙遜してゐることが貧を免がれ貨を整ふの一因であります。

以上の六ヶ條は世の金持にとつてよい戒めでありまます、是れを守つてさへすれば福德は圓滿し、結構な境涯を送つて行くことが出来るのであります。

二二 其の友を擇べ

「佛、言はく、惡知識に四業あり、

- 一には内に怨心有りて外に強て知識と爲る。
 - 二には人前に於て好く言語し背後に説て惡を言ふ。
 - 三には急有る時人前に於て愁苦し背後に歡喜す。
 - 四には外に親厚の如く内に怨讎を興す。
- 善知識に亦四業あり、

- 一には外怨家の如く内に存意あり。
- 二には人前に於て直諫し、外に於て人の善を説く。
- 三には病瘦縣官には其れがために從訟憂へて之を解く。
- 四には人の貧賤を見ては棄損せずして當に念ずべし、方便求めて之を富まんと欲

す。

悪知識に亦四業あり、

一には諫曉し難く、之に善を作せと教ふれば故らに悪者と相隨ふ。

二には之れに酒を喜む人と伴と爲る莫れと教ふれば故らに酒を嗜む人と隨ふあり。

三には之に自ら守れと教ゆれば益々更に多事なる。

四には之に賢者と友となれと教ふれば故らに博掩子と厚を爲す。

善知識に復た四業あり、

一には人の貧窮悴乏を見ては生を治せしむ。

二には人と諍ふて計校せず。

三には日に經て之を消息す。

四には坐起當に相念ふべし。

善知識に亦四業あり、

一には吏の捕ふる處となれば將ひ歸りて之を藏匿し、後に之を解決す。

二には病瘦あれば將ひ歸りて之を養視す。

三には知識死亡すれば棺斂して之を視る。

四には知識已に死亡せば復た其の家を念ふ。

善知識に復四業あり、

一には鬪せんと欲せば之を止む。

二には悪知識に隨はんと欲せば之を諫止す。

三には治生を欲せざれば勤めて治生せしむ。

四には經道を喜ばざれば教へて喜ませ之を信ぜしむ。

悪知識に復四業あり、

一には小かに之を侵せば便ち大に怒る。

二には急あつて之を請便すれば肯して行かず。

三には人の急あるを見る時は人を避けて走る。

四には人の死亡を見て棄て視ず。

佛言はく其の善き者を擇んで之に従へ、惡き者は之を遠離せよ、我善知識と相隨ひて自ら成佛を致せり」

前に擧げました六事の中の、その第五番目に惡しき友と交はることに就ての戒めがありましたが、世尊は更に此の惡友に四つの種類があると仰せられてあります。

一には心の中には嫉みを含みながら表面だけは親友のやうな顔をしてをるもの。

二にはその人の面前では親切らしいことを云ひながら、蔭に廻つて惡口を云ふもの。

三には人に災難不幸等があつた場合、その人の面前でだけはさも愁ひ悲しむやうな振りをして、蔭では却つて之れを喜ぶもの。

四には表面でだけ親切らしく交はつておいて、心の中では絶えず機會を覗ふて、

之れに怨をしゃうとする考へを持つてをるもの。

斯ふ云ふ友達と交ふことは、本人の利益でないことは云ふまでもありません。此れと反對の良い友の方にも亦四通りがあるのであります。

二三 主従の心得

五事の心得……主人の心得……使用人の心得

一 五事の心得

- 「地に向つて拜する者は、謂く大夫奴客婢使を視るに亦五事あり、
- 一には當に時を以て飲食せしめ衣服を興ふべし。
 - 二には病瘦には當に醫を呼びて之を治せしむべし。
 - 三には妄りに之を搥捶するを得ざれ。
 - 四には私の財物有らば奪ふを得ざれ。
 - 五には分付の物に平等なるべし。
- 奴婢使の大夫に事ふるに亦五事あり、
- 一には早く起き、大夫をして呼ばしむること勿れ。

- 二には當に作すべき所は自ら心を用ひて之を爲せ。
- 三には當に大夫の物を愛惜すべし。乞向の人に棄損するを得ざれ。
- 四には大夫の出入には當に之を送迎すべし。
- 五には當に大夫の善を稱譽すべし、其惡を説くを得ざれ。

二 主人の心得

世尊に既に東西南北の四方を説き終り、地に向つて拜するに就て主従の道を念へとお示しなされるのであります。大夫の奴客婢使を視るに五事ありと仰せられました。此處に大夫とありますのは主人の事でありまして、奴客は男の雇人、婢使は女の雇人のことであります。偕て此の主人たるものが、下男下女乃内は家職の者を召使ひますのに、

- 一には當に時を以つて飲食せしめ、衣服を興ふべし。

二には病瘦の爲めには醫師を呼んで之を治せしむべし。

三には之を打擲すべからず。

四には私の財物を奪ふべからず。

五には分布のものは平等なるべし。

第一は、召使ひの者には衣食の不足ないやうに給與し、其の生活の安定を保證してやれとの仰せであります。若し店員とか下男下女其の他家職の者に病氣に罹つた者があつた場合には、其の病氣の重い輕いに拘はらず、直ちに醫師に見せて其の治療を怠るやうなことがあつてはならない。又奉公人に對してたとへ氣に入らぬことがあつたり、自分の云ひ付けに逆ふ行ひがあつても、濫りに之れを打ち打擲するやうなことがあつてはなりません、之れを本文には、

「搥捶」

と仰せられてありますが、搥は即ち打つと云ふ字であり、捶は即ち鞭うつと云ふ

字であつて、俱に使用人の虐待をお戒めになつた言葉であります。世の中には能くあることとありますが、達者で働く時には勝手に追ひ使ひ、アレをしろコレをしろと重寶しながら、病氣にでも罹りますと、之を追ひ出すと云ふやうな無慈悲な行爲が主人にあつてはならぬ、更に主人と云ふ權柄に任して、其の召使ひが自分で持つて居る物まで之を取り上げて仕舞ふと云ふやうな、亂暴な行ひをすると云ふことは主人として之れを行ふてはならぬと御注意になつてをります。又物を與へますにも公平を旨として、甲に厚く乙には輕いと云ふやうな、依怙最負の沙汰があつてはならぬと仰せられたのであります、奉公人の心を收攬し、人を使ふの道は之れに盡くされております。今日工場法とか、勞働法とか色々喧しく世上で申されてをります、是れ等は使用人の方に此の心掛けがありさへすれば問題はないのでありまして世尊が三千年の昔に此の事を説きなされたと云ふことは、實に敬服の外はないのであります。

三 使用人の心得

その次には使用人にも五つの心掛けが必要と仰せられてあります。

一には早く起きて大夫を呼ばしむる莫れ。

二には當に爲すべき所は自ら心を用ひて是れを爲せ。

三には大夫の物も愛惜すべし、妄りに乞匄の人に棄損せざれ。

四には大夫の出入には當に送迎すべし。

五には大夫の美を稱譽すべし、其の惡を説くことを得ざれ。

と人の許に使用人として働いて其の將來に大を爲さんと心懸けてをる人は、たとへ只今の境遇が何であらうとも、自分から僻んで卑屈な考へに落ちるやうな事があつてはならないことは勿論であります。世の中には小僧から長老はないのでありまして、長幼序ありと云ふ譬への如く末では大海に注ぐ水も、一時は木の葉の下を

潜らねばならぬ命運に置かれてあります。それでありますから今人に使はれてをると云ひましても、やがては人を使ふて通らねばならぬ時が参りますので、朝でも、主人から起されて初めて起きると云ふやうなことがあつてはなりません。必ず早く床をけつて起き、主人の命を待つこととあります、主人に命ぜられました仕事に就いては、十分の注意を以て之れに當り、決していゝ加減なことをして、主人の目の前を眩ますと云ふやうなことがあつてはなりません。又主人のものであるからと云ふので、物を粗末にしたり、勝手に人に之れを呉れたりと云ふやうな不謹慎なことがあつてはなりません。主人の利害は自分の利害と考へて、誠心誠意之れに當ることが肝要であります。主人を思ふことは自分を思ふ如く、主人の仕事は自分の仕事の如くに、而して主人のものは自分のもの、如くに大切にせよと、御教訓なされてあります。主人の出入には之を送り迎へをいたしますのは、何でもないのであります。主人の出入には之を送り迎へをいたしますのは、何でもないのであります。其處に使用人對主人の美しい感情の表はれがありました。又使

用人たるもの、禮儀の一つとせられてあります。或は又主人の悪口を言ひ歩くやうな雇人は、其の將來に於て頗る大成の素質が薄いのであります。故に世尊は以上の五事を擧げ、主従の道をお明し下されたのであります。

二四 浄土教問答

佛教の目的如何……二門とは如何……三心とは如何……十善とは如何

一 佛教の目的如何

〔問〕 佛教を奉ずる目的は如何、

〔答〕 迷を轉じて悟を開き、無上の自在を得るにあり。

〔問〕 その迷とは如何、

〔答〕 心の闇に蔽はれて眞の道を踐みはづし、生々世々苦み悩むことなきなり。

〔問〕 悟とは如何、

〔答〕 心の闇の雲霽れて月の隅なく照すが如く、所有ことを知り盡し少しばかりの束縛もなし、これを無上の自在といふ、即ち證果なり。

〔問〕 此の目的を遂ぐるにはいかゞなすべきや、

〔答〕 佛の教に遵ひて怠りなく止まざれば、自然に佛果に到ることを得るなり。

〔問〕 佛の教へとは如何、

〔答〕 總じていへば諸の悪事を止め衆々の善事を行ひ、自ら其の意を淨くするに外ならねども、其の中おのづから二門にわかる。

〔問〕 悪といひ善と云ふはいかなるものなるや、

〔答〕 悪とは良心にはづべき自の爲にも他の爲にもならぬ、惡むべき所爲、賤しむべき意業をいひ、善とは良心よりして自の爲にも他の爲にも讚むべき行爲

貴ぶべき行爲を云ふ。

〔問〕 何故悪を誡め善を勧むるや、

〔答〕 既に悪は良心にはづべき業なれば之を誡め、善は自他の利益となることなればこれを勧む、そのうへ原因には必ず果報あることは宇宙の道理なれば、善

き種には善き果を結び、悪しき原因には悪しき果報あり、さればもし悪事を爲せば生きて、人に輕賤度外視せられ、死しては忌み嫌ふべき惡道に墮ち、若し善事を行へば、此の世にありては人に愛慕尊敬され、末世には愛樂を得べき善趣に生る、それ故悪を誡しめ善を勧むるなり。

二 二門とは如何

〔問〕 二門とは如何、

〔答〕 自力の聖道門と他力の淨土門となり、丁度帝都に登るに徒歩と汽車の異ひなるが如し。

〔問〕 自力の聖道門とは如何、

〔答〕 自ら戒法を持ち、禪定を修し、無漏の眞智を發して他力を頼まず、此の世に於て覺を開く教なり、なほ徒歩にて都に登るが如し、されば之を難行道と

名く。

〔問〕 他力の淨土門とは如何、

〔答〕 深く佛の本願を信じて佛名を稱へ、佛の増上縁の力に助けられて淨土に往生

し、彼土に於て悟を開く教へなり、丁度汽車や汽船で上京するが如し、故

に易行道ともなづく。

〔問〕 然れば聖道門は一向に他力を頼まず、淨土門は少しも自力を用ひざるや、

〔答〕 聖道門は主に自力によりて少しく佛力を頼み、淨土宗は重に佛力を頼みて、

自ら往生の心行を勵む故にその重なる所に就て聖門道門を自力と云ひ 淨土

門を他力と名づく。

〔問〕 この二門の勝劣なきや、

〔答〕 上に述べし如く、帝都に登るは徒歩と乗車の異りあるに同じ、故に遅と速の

相違はあれど、おなじ都に到ることなれば何れが勝何れが劣と云ふことはな

きなり。

〔問〕 二門に勝劣なくば我等は何れの方に従ふべきや、

〔答〕 若し自ら智意の眼明かに修業の足健なりと思はゞ聖道門によるべし、されど

我身劣にして到底此の上に於て自ら悟りを開くこと能はずと知らば淨土門に

よりて佛の本願を頼むべし。

〔問〕 淨土門によりて往生を願はんには如何なることを爲すべきや。

〔答〕 たゞ心に助けたまへと念じ、口に南無阿彌陀佛と唱へておこたらざれば安心

起行その間に備はる、されど人には虚假心や疑心あるゆゑにその心の病を治

せんが爲めに心を分ちて三となす。

三 三心とは如何

〔問〕 其の三心とは何ぞや、

〔答〕 至誠心と、深心と、廻向發願心とにして、これは行者の心の置きかたなり。

〔問〕 至誠心とは如何、

〔答〕 偽り飾ることなく、眞實至誠の心をもて往生を願ふなり、すべて何事にも

眞實心と内心と外相と相調はざれば成功をなし難し、まして往生淨土の一

大事をば虚假名聞の心にてとくべき道理あらぬなり。

〔問〕 深心とは如何、

〔答〕 我等の如き、つたなきものは、到底自力にては悟を開くにたへざるも、たゞ

阿彌陀如來の大願力によりて、往生することを得と深く信じて毫厘も疑は

ざるなり。たとへ世間のことをなすにもふかく信ずること肝要にて、その成

否をあやぶみては仕遂ぐることに難し、まして淨土を願ふには狐疑心ありては

往生出来ぬなり。

〔問〕 廻向發願心とは如何、

〔答〕 爲せし所の善根を往生淨土の爲とひたすら願ふ心なり、例へば馬車あれども

馭者なければその向ふ所を知らざる如く、善根あれども廻向發願心なければ

往果定まらぬなり。

〔問〕 この三心は必ず具足すべきや、

〔答〕 もし一心にても缺けぬれば往生することは叶はじ、故にこの三心は最も行者

の必要とす、然れども前に述べし如くに心を三となすは、人の虚假心や疑心

や不廻向心ある故にこれを治さんが爲めに外ならず、さればこの病なき人は

別にことごとくしく三心の沙汰に及ばず、三心とは總じて云へば偽らざる心を

もて、佛の本願を信じ淨土に往生せんと願ふ心なれば、唯一心に助け給へと

念じて佛名を唱ふれば自ら三心具足するなり。

〔問〕 安心は既に聞きぬ、その起行とは如何、

〔答〕 たゞ口に南無阿彌陀佛を唱ふるなり、これ佛の本願なるが故なり、されば一

念ねんは往生わうじやうすと信しんじてますく多た念ねんを勵はげむべし。

「問」その念佛ねんぶつする時ときの行儀ぎやうぎ作法はうい如何かん、

「答」別べつに時日じじつを限かぎり處ところを定さだめて勤つとむることあれど、尋常じんじやうの行儀ぎやうぎは別べつに作法さほうあるこ

となし、たゞ行住坐臥ぎやうぢゆうざわい時ときと處ところに構かまひなく佛名ぶつみやうを唱となふれば、佛ほとけの本願ほんがん増上ぞうじやうの

力ちからによりてたやすく淨土じやうどに往生わうじやうすることを得うるなり。

「問」淨土門じやうどもんの信徒しんとは平常へいぜいの所作しよさたゞ念佛ねんぶつの外ほか爲なすべきことなきや、

「答」往生わうじやうの行業ぎやうぎには念佛ねんぶつを以もつて先さきとす、されど此この世よに處しよすには、又また人間の履ふ

むべき道みちありて十善じゆぜんを行おこなひ、四恩おんに報ほうぜざれば人ひとにして人ひとに非あらずと云いふべし。

四 十善とは如何

「問」先まづ其その十善じゆぜんとは如何いかん、

「答」身みに戒いましむべきもの三さん、語ごに謹つしむべきもの四し、心こころに慎つしむべきもの三さんあり、これ

を合あせて十善じゆぜんと云いふ。

「問」身しんに戒いましむべき三さんつとは何なんぞや、

「答」不殺生ふせつじやうと不偷盜ふとゆうたうと不邪淫ふじやいんとなり、不殺生ふせつじやうとは慈愛じあいの心こころをもて生いきとし生いける

ものを救攝きうせつして殺ころし害こそはぬなり、不偷盜ふとゆうたうとは他たの福利ふくりと謀はかり慈惠じけいの行ぎやうをなさ

ず、たとへ一本いっぴんの針はりなどにて他たのものものを尊たふとび盜ぬすまぬなり、不邪淫ふじやいんとは禮節れいせつ

を旨むねとし男女だんぜよの道みちを正ただしくして他たの妻つまなどに心こころをかけぬなり。

「問」語ごに謹つしむべき四しつとは何なんぞや、

「答」不妄語ふまうごと不綺語ふきごと不惡口ふあくこうと不兩舌ふりやうぜつとなり、不妄語ふまうごとは言葉ことばに偽いつはりなくして見

し事ことを見たりと云いひ、見ぬことを見ぬと云いふなど、すべて心念しんねんと言語げんごと違たがは

ぬを云いふ、不綺語ふきごとは益えきある語ごも正直しやうじきに云いひて、雜穢ざつゑしん心しんよりおこる所ところの謗ひ嫌せん

佞諂まいえんなどの言げんを云いはぬを云いふ、不惡口ふあくこうとは溫和をんわなる言葉ことばを用もちゐて人ひとを罵ののし辱はか

めぬを云いふ、不兩舌ふりやうぜつとは他たの親睦しんぼくを助たすくる言げんを用もちゐて離間りかん語ごをいひ他たの親睦しんぼく

をやぶらぬを云ふ。

「問」心に慎しむべき三つとは何ぞ、

「答」不慳貪、不瞋恚、不邪見と也。不慳貪とは各自その分に安んじて他の財物威

權などをみだりに貪り求むる心を起さぬなり。不瞋恚とは心に慈悲忍辱に安

んじ、己に従はぬとてみだりに憎み、恚つて他を復害ふ心を起さぬを云ふ。

不邪見とは因果の道理を辨へ、篤く三寶を信じ、悪事を怖れ善事を營むを云

ふなり。

二五 老子三寶の説

老子は孔子と時代を同うして支那の聖人であります。その説く所は非常に深遠な哲理に基礎を置くと共に一面にはまだ實踐道德として直に處世の要訓となるものが少くないやうであります。

その三寶の説の如きは、特にこれを修養上に實行し、處世上に實行して最も感銘深き千古の金言と思ふて居ります。

(老子第六十七章抄録)

「我に三寶あり、持て之を保つ、一に曰く慈、二に曰く儉、三に曰く敢へて天下の先と爲らず。

慈なるが故に能く勇、儉なるが故に能く廣、敢へて天下の先と爲らざるが故に能く成器の長たり」

總て世に處する上になくてかなはぬものは勇氣であります。勇氣は生活の彈力であります。誘惑を斥くも、忍び難きに堪へ忍ぶも、所信に邁往する氣魄も皆此の力であります。勇氣の源泉は慈愛である、其身を愛して其の身を修め、祖先の家と其の家族を愛して其の家を齊へ、祖國を愛する精神が充實して、社會の爲め國家の爲身を挺して働くことも田來るのではあるまいか。

儉は儉約であり、つゞまやかであります、金錢を浪費せざるも儉約であります、時間を空費せざるも儉約であります、つまらぬことに頭を痛めぬのも儉約であります、平素力を蓄ふる心懸があつてイザといふ場合に充分の働きを爲すことが出来るのではありませんか。

敢へて天下の先と爲らずといふのは、謙遜の徳を養ふところでもあります。つとめて功を他人に譲り、縁の下の方持となつて働くことでもあります。此の修養を實行することが出来ればいつか必ず他人の推稱歸服を得て、萬人の長と崇められる期が来る

に違ひないと云ふのであります。

慈愛と儉約と謙遜、これが處世上三つの寶であると云ふのであります。佛道修行も大智大慈の如來を信仰の土臺として修養の徳を積めば、やがて是等の三徳が備るのであります。

二六 まことの道

人の道と鼠の道……「まこと」とは何か……舍利弗尊者と馬勝……裸一貫の自分を眺めて……人間の道具が前にある理由……人間の特徴と皮肉の實例

一 人の道と鼠の道

「まことの道」

と云ふことは分りきつた話でありますが、

「誠は天の道なり、之を誠にするのは人の道なり」

とありまして、人としては是非とも此誠の道を通らねばならないのであります。行誠上人の歌にも、

はりつたふ鼠の道も道なれど

誠の道ぞ人のふむ道

と云ふのであります、この人たる道を忘れて、餘り勝手な道を通りますと、鼠にも笑はれる事になります。鼠泣きと云ふ事はさくりますが鼠笑ひなどはとても感服出来ません。

二 「まこと」とは何か

さて、しからば一體誠とはどんな事かと申しますと、是は「ま」と「こと」との二つの詞をクツ付けて一つにしたものであります、下の「こと」は「ことば」の略であります、上の「ま」と云ふことが中々意味深長なであります。つまり裏表のない、曲つてをらない、雜りけのない、キ一本と云ふ様な心持を含んでるのであります。試に二三の例を擧げて見ますと先づ色で申せば赤、白、青、黒などには、まを付けることが出来まますので、まつ白、まつ赤、まつ青、まつ黒けの氣、無論下の氣

は餘り必要ではありませんが、など申す。まの意味は一筋の色であつて雜り氣の無い事を顯はしたものであります。だから海老茶、オリブ、紺青などは混合して出來た色ですから無論「ま」を付けると變な事になります。まオリブ、ま海老茶、ま紺青では變でせう。つまり「ま」が付けられないのであります。形で申しますならば「まつ」角とかまん丸などは最も正しい形でありまして、其他の形には「ま」が付かないやうであります。又方角で考へて見まして、其通りで、ま東、ま西、ま南、ま北、ま上、ま下、まん中など、申しますが、これは少しもくるうて居らない場合に限り、一寸でも方角にくるいがあつてはまを付ける譯には參りません。

ですから「まこと」と云へば私共の慾や腹立や、愚痴などの、所謂煩惱の穢れに染まない、うぶな、純な赤子の心の様な天真爛漫の其のまの心が詞に顯はれ、更に其れが行の上にも顯はれた様な場合を申すのであります。是れが實に天地に恥ぢない誠の道を通つて居る事になる譯であります。言ひ換ますれば、身、口、意の

三業の全く一致した有様が誠なのであります。即ち行ひと、言と、心との三つを一致させる事が出来る様になつたならば、初めて立派な人間になれたのであります。餘程修養をつまねば誠の道を守る事は出來ないのであります。明治大帝の御製にも、

ともすればあらぬ方にと踏み迷ふ

教へ難きは人の道也

と仰せられてありまして昔釋尊の十大弟子の一人に數へられて居る利舍弗尊者は元波羅門教の學者でありまして、多くの弟子を持つて得意の生活をしてゐましたのですが心には未だ十分の安心を得て居なかつたのであります。

三 舍利弗尊者と馬勝

所が或る日此の舍利弗が城中を歩いて居りますと如何にも見すばらしい一人の僧

侶に出合ひました。身にまとへるものは誠に御粗末ではあるが、何となく威厳があつて自然に頭が下がる様に覺えますから、これは尋常一様の人ではないと氣付きまして、舍利弗尊者が其人を呼び留て、

「貴方は何と仰しやる方でありませうか」

と尋ますと、

「私は馬勝と云ふ者で全くつまらぬ者でありますが、私の御師匠は釋迦と申す貴い方でありませう」

と答へますと、舍利弗は弟子でさへ是れ程立派な態度が顯はれるとしてみれば、其の師匠は餘程勝れた方に相違ないと考へまして、朋友の目連と共に直に釋尊の所へ參つて教を乞ひ遂に眞理を悟りまして、後には二人とも大弟子となつたと云ふ事でありませうが、若し此馬勝の態度や様子が平凡であつたならば、此二人の人も久しい間釋尊を知る機會に出合はなかつたかも知れませぬ、して見ると、日常の一舉

一動にも私共は深く注意せねばならぬのであります。之れは動作が他を感化した例であります、詞に致しましても、

「三寸の舌で五尺のからだをば養ひもし、失ひもする」

と云ふ古歌の通りで言の働き一つで一家眷屬を養ふて行く事にもなれば、僅かの物の言ひ様が行違ひの本となつて人を殺す程の大事件をしでかして遂にはその身の破滅を招いた例も澤山あるのであります。是れ亦常に慎まねばならぬ大事であります。伊藤仁齋は人の過を云はざるを以て樂みとしたさうです、惡口を云はねば面白くないと云ふのは人格が劣等の證だと云はれても仕方ありません、心の大切な事は今更申す迄もありません。斯の如く心と、行ひと言との三つは互に密接なる關係を持つて居りますので、つまり相方の間には互に因果の關係がありますから、日夜に注意して、この三つが一致する様に努めるのが修養上肝要の事でありませう。

四 裸一貫の自分を眺めて

佛が三業は平等であるとか、三業を以て法を説く即ち口の説法、身體の説法、心の説法があると經文に説けるのも此の事を指したのであります。私はつらく人間にんげんの生地きぢの儘を見まして即ち「はだか」一貫の自分を顧みた時に餘程面白いものだと思ふと同時に中々有難いと感心して居る事があります。皆様も一つまつばだかになつて大きな鏡の前に立つた時の様子を御考へになつて頂きたいのです。すると必ず何か御氣付きになる事がある筈です。則ちよくもマア斯う一切の道具が正面に揃つたものだと云ふ事に御氣が付かるゝであらうと信じます。

これは「心學道話」にある話であります。昔京都の蛙が大阪見物に出かけましたが、丁度同時に大阪の蛙も京都見物に出かけまして、大阪と京都のまん中にあるあの天王山の頂上で二匹の蛙が落合つたのです。所が、大阪の蛙は僕は京都

見物に行くつもりで此處まで来たのだが、君はどうしたのだと云ふと、京都の蛙は僕は又君の出でこられた其大阪を見物する爲に此處迄来たのだと、互に話し合ひました。此處は丁度大阪と京都のまん中で、而も高い所だから、一つせのびをして先方の様子を伺ふて見やうと云ふ事になりまして、先づ大阪の蛙は京都の方を向いてそり上がり、京都の蛙は又大阪の方を向いて同じくそり上つて、御互に様子をシツカと見届けましたが、二匹とも大變驚いたのでした。其れは大阪の方を見た蛙は大阪は工業の都市で澤山の煙筒が並んでをつて、空は煙で何時も曇つて居ると聞いて居たが、是は又不思議、御本山の様な建て物があちこちにあつて、山は青く水は清くて元の京都と殆ど同じだと云ひますと、大阪の蛙も、京都は君の云ふ通り山紫水明の公園の様な所だと思つて居たら、どうも斯ふやつてながめて見ると煙筒だらけで空は曇つて居つて、元の大坂と大した變りがないと申しますから、其れなら御互に苦勞して見物に行くにも及ぶまいと二匹とも其所で別れて元へ引き返つたと云

ふ話がありますが、是れは蛙が立ち上つて先方を見た迄は如何にも気がきいて居る様ですが、もとく頭の先にくつ付いて居つた肝心の眼王が、立ち上ると同時に自然に背の方に廻つて仕舞ふた譯ですから、向ふを向いて居るつもりが反つて元來た後ろの方の景色が眼玉に映つたからであります。何んな動物でも直立させて見れば決して人間の様な都合には急になれる筈のものでありません。

五 人間の道具が前にある理由

其所を考へて見ると人間に限つて、かくも一切の道具が悉く正面に揃つて出来て居るのが如何にも私には難有い事だと思ふのであります。考へて御覽なさい、この狭い顔にまつげも、眼も、鼻も、口も一所にくつ付いて居るではありませんか尤も耳は横に付いてゐますが、其代り後ろにチャンとかこひがしてあります。其れから乳、おへそ、其下の一物、足に到る迄前にあります。背の方は全くの荒れ野原

の様で地面の高い大阪などでは實に勿體ない位廣々として居ります。手は横に付いて居ますが、然しその手を働かす段になると横では到ても大した仕事は出来ません何うしても前で使はなければ、字も書けず御裁縫も出来ません。足にした所で前にこそ歩みも走りも出来ませんが横歩きや、後走りなどは永つづきは出来ません。

こゝが大事です、之は一體何を意味するのでせうか。人間たるものが若し眼を使つて物を見るならば必ず前の方見さへすば、其れば能いと云ふ事を顯はしたのでなければならぬと思ひます。若し後ろ迄も見なければならぬと云ふならば、其れは後ろで誰か悪い事を仕たり、ごまかしをやる奴が有るからではありませんか。又聞く時には左様で、前の事さへ聞けば能いのです。後ろの事迄聞く必要がある、其れでなければ安心できぬと云ふならば必ず蔭口を云ふ悪い奴がある證據です。口に出して物を言ふにしても同じ道理で、如何なる人の前でも言へる事さへ言ふて居れば間違はない筈です。何時も放送して居る位の覺悟で話をすれば、實に立派ではあり

ませんか。其れを人に聞かれてはいけない事などを云はうとするから録でもない事が起るのです。袖の下から金をつかんで見たり、蔭で悪口したりするから遂に手が後ろへ廻る様な羽目に陥るのはむしろ當然と申さねばなりません。折角御互に人間と生れて斯く正面に總て働くべき様な身體を頂いて居るのですから、是れを正直にさへ使へば、決して世の中に間違などの起る心配はないのであります。人間が人間の道を守ると云ふ程分りきつた事がないのですが、其れが中々容易に出来ないとは誠に御恥かしき次第であります。何ぜ正直にやれないのでありませうか。私は斷言いたします。御互に他人さへうまく誤魔かせば、其れで済むと云ふ淺蕪な考へがあるからであります。つまり人間以上の神や佛の御思召を信じ得ないからであります。自分の心は詐る事が出来ないと同じ様に神や佛は遂に詐る事が出来ないと云ふ事に氣付かないからであります。

六 人間の特徴と皮肉の實例

人間は萬物の靈長だと自分免許で澄しこんで、人間以上の靈力を認めないのは、うぬぼれの頂上です。一體萬物の靈長たる點は何かと種々考へた末に、是には他の動物の眞似の出来ない三つの特徴があるからだと説いた學者があります。其三つと申しますのは一つには立つて歩くと云ふ事、次には火を自由に扱ふと云ふこと、第三には禮儀作法を守ることだと云ふのです。如何にも御尤でこの三つはどんな動物でも眞似は出来ません。所が一昨年あの關東の大地震の時はどうでありませんか。此三つが悉く裏切られたのは如何にも皮肉ではありませんか、彼の地震の最中に、立つて歩くなどの藝當は到ても出来ないから、皆が一樣に這つて歩いたそうです。又禮儀作法なども無論守れる者はなく御互に突き合ひ押し合ひ、け飛し合ふて我れ一と飛び出しますと云ふ大亂痴氣をやつたのです。又火を自由に

使ふなどと大言したが、全く火からシツペ返しを食つて、幾萬の人々が火の爲にやられたのではありませんか。何所に靈長の値うちがありますか、地球はほんの一小部分が一寸働いてさへ、此サマでメチャ／＼になる様な人間が靈長などとすまして居るのは實に、身の程知らずの迷ひの連中と申さねばなりません。

大體人間が人間を導くほどあふない事はありません。盲人が盲人の道案内すると同然で、とても安心の出来やう筈はないのでありませんか。私共は結局何かの宗教によつて威大なる力を得るは、永遠に落ち付く事は出来ません、大慈悲と大智慧とを具足せる佛に導かれて進むものにこそ、人生一代の間も人間の道を完全に踏む事が出来ると信じます。要するに信仰のない人の生活ほど不安なものはなく、又まことの道を守ると云ふ事も、信仰を離れては到底實行が出来ぬのでありますから、私は皆さんと共に益々信仰の高まらんことに努めたいと念じて居るものであります。

二七 辛棒と思ひ槍

二本の長い嫁入道具……辛棒と云ふ棒……味ふべき教訓……
辛棒の三ツ

一 二本の長い嫁入道具

昔ある人が自分の娘さんを他家へ縁づける時、いろ／＼嫁入後の注意や、心得を言ひ含めた後、嚴に言ひ渡しますやうには、

「お前に最後のお訣れとして、二本の長い物をあげるから、これを大切に持つてお出でなせう」

と申しました。それは、そんなものであるかと娘は思つて居りますと、二本の長い物とは形のあるものでなく、又木や金で製らへたものではありません。一本は辛棒といふ長い棒であり今一本は思ひ槍といふ長い槍であると申しました。この辛棒

と思ひ槍といふ二本の長い物を嫁入道具の一番大切なものとして持つて行けば如何なる家庭に縁づいても、よくその家風に從つて圓滿なる家庭の主婦として婦人の道を守つて行くことが出来るのであります。これは平易な比譬で以て嫁入後の婦人の守るべき道が大へんよく言ひ現はしたものであります。世には自分の娘の可愛い情に囚へられて澤山な嫁入道具を製へてやる親達もあり、澤山な衣裳を持たしてやる親達もあります。然し、今茲にお話するやうな精神的な嫁入道具を持たしてやる親達が幾人あるでありませんやうか。この辛棒と思ひ槍との二つは單に嫁入する婦人ばかりに入用なものではありません。苟くも人としてこの社會に處して行くに當り何人でも是非持つて居られねばならぬ護身用の道具であります。この二つの長い物さへ持つて居つて、これを守本尊として居れば人生はすべて幸福であり成功は期せずして達せられるのであります。

二 辛棒と云ふ棒

辛棒といふ棒は人が困難に遭遇した場合とか苦痛を感じた場合とかに、よくこれを支へる大切な棒であります。それで、この棒をいつも自分々々の胸のうちにしつかり把つて居つて、どんな困難なことにぶつつかつても折れないといふ丈夫な堅固なものとして置く必要があります。人生に一つの辛棒を修業する道場です。先づ母親のお腹の中に居る時は小さな中に手足も思ふやうに動かすことも出来ず究窟な思ひをして十月の間辛棒せねばなりません。十月過つて産れまして自由な天地の空氣に觸れても直ぐ思ふ通りになるものではありません。側の人のなすがまゝにせねばならず、襁褓や紐や着物などで米俵のやうに縛られて究窟な思ひをせねばなりません。學齡期になれば學校へ出なければならず、學校へ出れば子供相當な苦勞もあれば究窟を耐へて行かねばなりません。學校を出て一人前の人間となつて實際社會と

なれば益々究窟なことを複雑な事件が起つて来て、この辛棒をしなければ、どうしても世の中を渡つて行けなくなりませす。辛棒は人間が世の中を渡るに就て持つて産れた一つの義務だといふことが出来ませす。この辛棒をするにはどんな務が要るでしやうかといふ、先づ第一に一つの的を持たねばなりません。登山するに就ても山の途中には或は暑いとか或は苦しいとか、いろいろな困難に遭遇しますが、やがて絶頂に達することが出来るといふ希望がありますから暑いのも苦しいのを辛棒して行くことが出来るので、山登りには絶頂に達するといふ目的があるから様々な困難にうち克つことが出来るのであります。奉公をしてゐる人でも中途には、もうこんな苦しいことは厭だ、かういふ苦勞をするよりもと、いろいろな困難や苦勞に遭遇することがあります。然し年があげたらば自分の望み通の仕事が出来るといふ目的があるから、それを目的に苦しい辛棒をして奉公が務めるのであります。親は子供の立身出世を目的に辛棒して働きます。それで皆さんの中に若し苦しいことがあつたり困難なことに合つたりしたらばこれ一つと思つて辛棒をして頂きたいものであります。

三 味ふべき教訓

昔、ある所に大へん偉い有名な學者がありました。その學者に一人の母親がありました。年も取り大へん老衰して氣拔けがしたやうになつて居られます。その先生も最早五十に垂んとして居られますが未だに奥さんを迎へられませせん。それで人々が、

「なぜ五十にもなつて奥さんを迎へられませせんか」と尋ねると、

「あの大切なお母さん、殊に氣の確かでない母親を人手に世話させて若し行き届かぬことがあつたならば、私は誠に母に對して不孝の罪を免れませんから貰ひま

せん」

といつて居られたそうです。かういふ親孝行な先生ですから澤山な弟子が先生の門に集ります。それで、ある日のこと、いつもの通り門人を集めて講義をして居られると奥の間からお母さんが先生の名を呼ばれます。先生は直ぐ講義を中止し書物を見臺に閉せてお母さんの端へ行かれると、お母さんは

「あのどうくいふ音は何であるか」

と尋ねられる。先生は謹んで

「あれは裏を流れてをります水の音であります」

と答へられる。お母さんは、

「あゝ、そうか、それならば安心である。妾は又雷ではないかと思つた」

と言はれた。先生は講義半であるから用事は済んだから、もうよからうと思つて座を立つて、先の講義の續きを話されてゐると間もなく又先生を呼ばれます。先生

は前のやうに直ぐお母さんの側へ行かれると前と同じやうに尋ねられるから先生又前と同じやうに答へられるとお母さんは前と同じことを言つてさも安心したやうな顔をして居られる。先生は又元の通り講義を續けられる。すると又五六分過たぬ中にお母さんが呼ばれる。かくすること數回であつたにかゝはらず、先生は一度もいやな顔をせず直ぐ立つてお母さんの側に行かれる。大低の者ならば腹を立てる所であるが、流石は親孝行で名高い先生です。それで弟子達が先生に向つて、
「先生の親孝行であることは兼ねて承つて居りましたが、成程今日で感心致しました。つい先程から五六邊お立ちになりましたねー」
と申しますと先生は、

「いや一度しか立たなう」

と言はれたから弟子達も不審に思つて、

「いえ、一度と仰せになりますが見に五六度お立ちになつたではありませんか」

と申しますと、先生は

「いや、一度呼ばれて一度お母さんの側へ行つて歸れば一度はそれで終りぢや。次に呼ばれたのは改めての一邊ぢやから、私はいつも今一邊と思つて何でも辛棒する」

と言はれたそうです。誠にお互に守つて行き度い實に先生のよいお考へではありませんか。そこまで辛棒も徹底せねばならぬと思ひます。朝起きるのも毎朝早く起きると思へば辛い。今日一度と思へば別に辛くも感じません。酒を禁めにしても今日だけ禁めるといふ風に考へれば自然大酒家も後には酒を禁ずることが出来るのであります。かの英國で有名なネルソンは、

「人間は腹の立つ時はゆつくり數を一から十まで數へよ。數を數へて居る間に自ら腹が立たなくなるものである」

と云ふれたが誠に味ふべき教訓であります。

四 辛棒の三つ

それで、この辛棒のしやうに三つあります。

- 一 先を樂むこと。
- 二 今日一日と思ふこと。
- 三 胸をおさへること。

この三つは既に已前にくはしく申し述べ置きましたが、この三つさへ守つて行つたならば如何なる場合でも辛棒が出来ることと思ひます。辛棒のことはこれ位に致しまして今度は思ひ槍のお話を致します。

東京に一人の俳諧師がありました、ある晩の事外には雪がしとくと降り積つて世は一面の銀世界、かういふ雪景氣は又とは見られないとて、何所かへ出かけて雪見をして歌を作らうと、どん／＼降りしきる雪の中をもものともせず、一人の小僧に

供をさせてこれから出かけやうと致しました。所がその俳諧師の妻なる人がそれを見て夫に申しますには、

「あなたは自分のすきな歌を作らうと思ふてお出かけになるのですから別に辛い苦しいともお考へにはならぬでせうが、お供をする小僧の身になつて御覽なさい、これから暖かい寢床の中で寢やうと思ふてゐるのです。若しあの兒が自分の兒でもあつて御覽なさい、恐らくお供には連れて行かれぬでせやう、あの兒も家へ歸れば親の大切な子供です、よくお考へ下さい」

と云つて、

「我が子なら供にはやらじ夜の雪」

と一句の發句を讀みました。それで主人の俳諧師も成程と思つて雪見をすることをおもひ止まつたといふことであります。これは思ひ槍の實例であります。

一軒の家に致しましても、皆んなの人々の胸の中にこの辛棒と思ひ槍とがなかつ

たならば家庭はどうしても圓滿に治まつて行くといふことはありません。それに就いて茲に面白い話があります。九州の海濱に一人の漁師が棲んで居りました。漁師夫婦には一人の息子があります。その息子に何人嫁を迎へましても、どういふものか間もなく里方へ歸つてしまひます。そこで親戚の人々は大變心配して、どうか歸らない嫁を世話してやり度いものであると思つて居る。所がある日のこと、いつもの通に漁に參りますと俄に沖の方が荒れ出して風はすさまじく吹き浪は狂ひ出すといふ通で、とう／＼乗つてゐる舟は難船致しました。乗つてゐた親戚の漁師は漸くのこと泳いで辿り着きましたが、それは一つの孤れ小島です。島人に

「何んといふ島であるか」と尋ねて見ると、

「はい、この島の名は敗る島と言ひます」

と答へる。面白い名の島もあるものだと思つて、その島の人々をよく眺めると皆

んな、この島の人には敗れることが大へん好きである。争ひなどしても皆んな勝つことが嫌ひです。そこで今の漁師が考へるには、

「こんな島の娘さんを親戚の息子の嫁に世話をしてやれば必ず辛棒して呉れるであらう」

と思つて島人に話して一人の娘さんを連れて歸つて親戚の息子に世話致しました。所が流石敗る島に育つた娘だけあつて姑さんにでも亭主にでも誰れにでも敗てばかり居ります。姑さんの方も今近幾人息子の嫁を貰つても皆んな歸つて仕舞つたから世間の手前もある。又、嫁も敗て居りますから、今廣は三ヶ月程も家庭に波風が立たぬ。近所の人々も皆んな感心して居りました。所が姑さん、根が心の曲つた人ですから、今迄は辛棒して居りましたが、そろ／＼悪い性根が頭をもたげて來て毎日々々嫁いぢめばかりをやりませす。從順な嫁さんも辛棒し兼て、いろ／＼考へた末、

「これは自分は餘り敗てばかりゐるからである。一度口答をして見ませう」

と思ひました。肝心の口答することを知りません。それで仲人の所へ参りまして

「實は、かく／＼である、どうか口答することを教へて頂き度い」

と申します。流石は仲人、真面目な顔をして、

「口答をするには疊の上に兩手をついてニツコリとしてハイ／＼有難う存じますと

いふのである」

と教へた。嫁さん大變喜んで、

「さあこれから辛棒が出来ない時には口答をしてやりませう」

と思つて家に歸りますと、例の通り姑さん直ぐ聲を荒立て、

「何の用事があつて、こんなに永く外出してゐるのだ」

といつてわめき立てる。嫁さんは今こそ口答と仲人の教へた通り疊に兩手をつい

てニコ／＼して、

「ハイ、有難う存じます」

とやります。嫁さん心のうちで、むづかし家の姑さん口答をしたから今度はどんなに腹を立てることであらうと待つて居りますと姑さん、この有様を見て今迄よりも顔色を和げてコソ／＼と立つて外へ出て行きました。嫁さんは薩張り理由が解りません。こんな風なら時々口答するに限ると思つて、時々この口答を致して居りました。姑の方では、どんなに嫁をいじめても嫁は少も困らないばかりか反つて疊の上に両手をついてニコ／＼して、

「ハイ、有難う存じます」

といつて居るものですからいじめ答へがありません。その上に年も段々とりまします心も段々折れて来て、何れ死水を嫁に取つて貫はねばならぬといふことも考へるやうになり、嫁はこれだけ困らしてやつても歸らないのは何故であらうかと考へて見ると嫁の里は歸るにも歸れない遠い放れ小島である。はる／＼この日本へ一人て來

てをるのであるから、どんなに歸り度いと思つても歸れないからこんなに困らされても辛棒して居るのであらう、あれも國へ歸れば親もあらう兄弟もあらう。國もなつかしからう、親も慕はしからう、嫁の身になつてやれば淋しいこともあらう苦しういこともあらうと、とう／＼思ひやりの心が出たものですから、姑も我を折つて嫁を大切にすするやうになり、嫁も姑がやさしくなられたのを喜んで居ました。

所が、ある日の朝、嫁は油断したものか遅くまで眠つて居りました。姑は早く目を醒して見るとまだ嫁が起きて居らぬ、いつも嫁ばかりに御飯をたかすから今日は嫁も疲たかまだ眠つてゐる、どれ起きさせようと起き上つて御飯をたき出した。その中に嫁は起きて見ると、姑が勝手の方で御飯ごしらへの最中ですから、そこ／＼に着物を着換へて、姑に禮を申しますと、姑は何と間違つたのやら疊の上に両手を着

「ハイ、有難う存じます」

と申しましたから嫁はこれは口答であると思つてゐますから、これは自分は朝寢したのが姑の氣に觸つたが爲め姑が口答をしたのである。これは自分も口答をしませうと嫁さんも同じやうに疊の上に兩手をついて、

「ハイ、有難う存じます」

と申しました。すると、その有様を床の中から眺めて居りました亭主が何と思ひましたか又床から出て来て疊の上に兩手をついて、

「ハイ、有難う存じます」

と申しました。これを名づけて「有難家庭」と申します。

この話は何れ作り話でありませうが、この話のうちには味へばいろくいな教訓が含まれてあります。一家の中は主婦の心掛け一つによつていろくいな變化するものでありますから、この二本の長い物、即ち辛棒と思ひ槍とを上手に使つて圓滿な家庭を作つて頂きたいものであります。

二八 婦人の覺醒

「萬法は流轉す」

と云ふことは、昔から云はれたものだが、人間社會特に婦人の社會は劇しい變化をして來た。近時、改造の聲はあらゆる方向から聞えるが、婦人社會にはこの改造を要する事柄が殊に多いやうである。

人間社會が常に流轉し變化するばかりでなく、人間それ自身と常に變化してゐる。醫者の云ふ處によると、吾々の身體は僅々六七年の間に悉く一變すといふ。

人間といふものが此の世へ出來てから十萬年とも百萬年とも云はれてゐるが、少くとも四五十年は經過してゐるだらう。で、始めは下等な動物であつたのが、漸次進化して遂に今日のやうな人間にまで進んで來た。このことは既に疑ふべからざる事實として一般に信ぜられてゐる。アフリカの南方に居る人類は今尚ほ下等な人

種となされてゐるが此等の人間に較べて歐米人の進歩したことはお話にならぬ位である。身體の方面に於ても、精神の方面に於ても、社會の方面に於ても非常な進歩である。昔は吾々の周圍に、毒蛇であるとか、猛獸であるとかいふ色々な外敵が居つて、その上人間同志の間にも鬭争をするといふので、生活の點に於ては決して樂なものではなかつた。勿論、食物は今日よりも豊富であつたかも知れない。然るに今日では地救上十六七億もの人類が棲息し、食物の不足を來たし人間同志の競争が劇しくなつた。人類が國家を組織して各々一致團決して居ることは、一人一人で生活するよりも便利であるからである。かくて今日より百五十年二百年前から以後は急劇な變化をしたのである。

斯の如く人類社會が急劇な變化をしたに就てはどんな原因があるのであらう。その原因は正しく機械の發明があつたからである。昔時に於ては機械でなくて器具を使つた。下等動物にはこの器具さへも用ゐないのである。この器具が發達して矢弓

といふものが出來た。私はこの矢弓を發明した人は非常な天才であると思ふ。今日までに隨分立派な發明は澤山あるが、この矢弓の發明ほど偉大なものはなからう。この矢弓といふ器具が進歩して今から二百年程前に、紡績機、レースを編むといふやうな機械が出來た。殊に十九世紀に於ては益々立派な機械が發明され、蒸氣の力を應用する機械の如きは人間社會を一變したと云つていゝ、慥かに人間社會を根本的に改造したものである。

かくの如く人間社會に機械といふものが發明されてからは、人間に必要な物品は機械の力により専門的になつて、分量を多く、價を安く、且つ迅速に出來る様になつた。今までは一軒の家で米も造れば衣服も造るといふやうに、一切のものを製造したのであるが、それが夫々専門的になつた。それが爲に家庭制度、家族制度は壞される様になつた。

ところが、かゝる分業的専門的の世の中に、我國に於ては

「縫ふ」

といふことが一つ残つて居る。婦人の

「お仕事」

と云へば、着物を縫ふといふことである。吾々が眞面目にやることは、すべて仕事である。眞面目でない仕事は、

「遊び」

である。然るに

「お仕事」

と云へば、たゞ着物を縫ふことだとすることは、日本社會に於ける一種の迷信である、朝鮮の婦人は朝から晩まで洗濯ばかりしてゐるが、日本の婦人は一年中、所謂お仕事ばかりをして居る。古い人は、
「うちの嫁は女學校も卒業してゐながら着物も縫へぬ」

と云ふが、これは日本現代に於ける喜悲劇である。恁んなことを云ふ人は頗る野蠻な人で、今日女學校に於て裁縫の時間の多いといふことは、以ての外の誤りである。刻々に變つて行く社會に應じ、その社會に適する様にしない民族は退歩し、遂には滅亡する。婦人のお仕事、婦人の務めは、着物を縫ふことではない。他にその本分、本職があるのである。婦人でなければ出来ないといふ仕事は、婦人本來の仕事であり、本當の仕事である。若し婦人の仕事は着物を縫ふことであるとすれば、それを徹底すれば婦人は糸も紡がねばならぬ、機も織らねばならぬといふことになる。しかし如何に古い人も今ではこゝまでは云はぬ様だ。

最近兩三年の間に、ロシアを初め、朝鮮、エジプト、トルコ等、澤山の國が滅亡した。少し油斷をすればすべて此の通りで、我が日本も亦さうである。眼前の實例によつて疑ふことが出来ない。今日我が日本の婦人が、誰れにでも出来る様な仕事をして、婦人でなくては出来ないといふ仕事を忘れてゐる様では、日本國家の滅亡

は當然なことである。婦人は我國人口の半數を占めて居る。この婦人の力は至極大切な力を、つまらぬ仕事に浪費して居るといふことは、新しい婦人として深く考ふべき問題である。しかもこれは單に一例であつて、此の外にもかゝる力の浪費は澤山にある。これを經濟的にやるといふことは日本婦人目下の急務である。今日生活難の爲に諸種の節約法が説かれてあるが、今云つた様に婦人の心身が昔の迷信の爲に浪費されて居ることを忘れて居る。時々刻々に社會に活きんとする婦人は、今後の社會に適する様にせねばならぬ。

そこで將來の婦人は、頭を使ふといふことが大切で、今日では種々の機械が發明され、理化學の知識は勿論のこと、衛生の方面に於ても婦人の頭を使ふことに盡力せねばならぬ。然るに普通に行くといふ迷信が婦人社會に多いといふことは遺憾である。で中流以上の婦人は、低級な高等女學校位で満足せず、益々高等の教育を受けることに努めねばならぬ。社會は刻々に變化する。この變化する社會に應ずる

爲には婦人も亦變化され改造されねばならぬ。勿論、新舊思想の衝突は、何れの國何れの時代にもあるのであるから、そんなことを考慮せず、どしどし改造變化すべきである。

以上は人類社會に於ける變化の方面をのべたのであるが、此の變化の一面には恒常の方面があることを忘れてはならぬ。人間社會は機械の發明の爲めに急劇の變化をしたとは云へ、人間が人間である以上、變化することの出来ないものがある。人體は骨から骨と肉とから成り、目は横に、鼻は縦である。この方面は何時までもこのまゝで續くらしい。勿論、變化進歩して頭の後部にも目が出る様になるかも知れないが、まづ當分はそんな事もない様だ。かく一面に於て變化しない恒常の方面がある。その一つとして婦人の力によつて子孫の繁殖が營まれるといふことがある。この事は變りさうもない。婦人が子を産み、子孫を保育することは將來に於ても變化なからう。この仕事は世の始めから婦人の仕事として最も大切なものであるから

これだけは廢さない様にせねばいかぬ。私は、近頃の婦人問題を論ずる人達の中には、この重大な仕事を忘れて居りはせぬかと思ふ。多くの婦人論者は、たゞ男子の眞似をしやうと叫んで居るのである。否、西洋に於て男子が少くなつた爲に、女子が止むを得ず男子の仕事をする様になつたその眞似をして居るのではなからうか？ 外に出て働く爲に、乳呑兒を家に残して牛乳を興へて自分の乳は徒らに捨て、仕舞といふのは大なる誤りである。牛乳は牛の子の呑むべきものである。人の子は人の乳を吞まざねばならぬ。

一體、婦人のこゝろは、子供といふものに集注されるものだ。婦人の満足は子供をアヤして居る時である。西洋の婦人が文明病に罹つて、みな共に家庭を棄てて社會に飛び出すやうになつてから、その顔は漸次神經質になり、何れも不満足さうな顔をしてゐる。社會に出て花やかな活動をするのは、人目にも付き易く、誰れもやりたいことではあるが、しかも婦人がこれに走つて仕舞へば、衷心非常の寂寞を

感ずるのである。今や我國の婦人がかゝる西洋婦人の眞似をして、婦人でなくては出来ない仕事を忘れやうとしてゐる。かくて遂には自己の不安、寂寞、煩悶を發見する時が必ず來るのである。

婦人の仕事は男子のそれよりも遠大なものである。男子の仕事は、たゞその日その日の糧を得るといふだけである。然るに婦人の仕事が目先が花々しくないとはいふので、男子にでも出来る仕事をしやうとして、婦人の大切な仕事を忘れるといふことは、慥に日本の社會から云つても、また人間自身から云つても間違つたことである。婦人が、男子でも出来る仕事に従事することが、最大の能力をあげることになるかどうか？ 一圓か二圓の金を儲ける爲めに、子供を棄て、顧みないといふことは、果して自己及社會の爲めに利益があるかどうか？ 此の際反省一番すべきである。婦人の高等教育は頗る必要であるが、しかも婦人としての仕事を忘れるといふ様なことは、婦人が「人」たることを忘れたものである。

二九 報恩の眞意義

我國に於ける報恩思想……誤られた四恩の考へ……覺醒への生活……父母の恩……國王の恩と衆生の恩……三寶の恩

一 我國に於ける報恩思想

大乘 佛教の報恩思想と云ふことは、古來我が國民に知られてゐる。小松内府重盛が、入道清盛の忘恩的振舞を西八條の館に諫めし時。

「心地觀經」

の文を引用して、

「先づ世に四恩候ふ、天地の恩、國王の恩、父母の恩、衆生の恩これなり、その中に尤も重きは朝恩なり、普天の下玉地にあらずといふことなし云々」

と云つて居る様に恩を恩と感じて行ふのを報恩と云ふのである。又剃髮の偈とい

ふに、

「三界の中に流轉して、恩愛を斷つこと能はず、恩を棄て、無爲に入るは、眞實の報恩者なり」

とある。從來の日本の習慣として、出家せんとして、今日まで御厄介になつた親に別れる時、或は悪い事をして申譯の爲に剃髮する時、或は病氣の爲めに出家する時、隱居、入道、皆此の偈文を用ふるのである。それを爲さずして死んだ時は、寺僧が枕經に此の偈を唱へるのであつて、日本人の生活を裏面から眺めると、此の偈文とは因縁淺からざるものがある。過去の歴史も、現代も此偈文に支配されて居るのである。然し乍ら、四恩を考へと、剃髮の偈を通じて考へられた報恩の觀念はしばしば誤られて居つたのである。

二 誤られた四恩の考へ

四恩とは、父母の恩、國王の恩、衆生の恩、三寶の恩である。かゝる四つの恩を痛切に感じ四恩のおかげだと有難がられるのは、昔の事、現代の人では、中々そんなことでは承知をしない。第一、三寶の恩……佛法僧……と云ふ事などは無いだらうと考へて居る。故に之は後に述べるが、我々が生活する上に於て衆生恩（社會の恩惠）と云ふことは確かに感じられる。即ち人が互に相依り相助けると云ふのが衆生の恩である。ところが此の恩に就て労働者は云はすれば、我々にはそんなものはない。親爺が貧乏で、一文の財産も貰やあしないし、會社の重役や株主は、我々労働者に、何等の待遇をしては呉れない。私には衆生の恩はない、反つて會社の重役こそ我々の恩を蒙つて居る。労働者は只だ口を糊する丈の賃金で、その日／＼は汗油をしぼられる、社會の人々は我々をしぼり上げて仕舞ふのである。といふものがあるがかう考へては衆生の恩も駄目である。

次で國王の恩はと云ふに、此の恩もそうだ、一國が國家政治の上に於て、國民が大恩を蒙るのは國王である、國土の中の人間はお互ひ同志である、勤勞するものが勤勞せぬものに恩を恵むのである。故に國王の恩、國王の恩と云つて、壓へつける必要はないと云ふ國王よりは國土の恩、天地自然の恩と云ふのなら……と疑ひを抱いて居るものもないとは云へぬ。

それでは最後に、恩は父母にはあるだらうと云へばそれは確かにある。が然し待つて下さい。

「生んで貰ふた」

と云ふと頼んだ様であるが、親が勝手に生んだのであつて、勝手に可愛から可愛がつたまでのこと、何もさう恩に着せる必要はない。尤も莫大の財産でも遺したのなら、少しは恩もあらうが死んで借金を残されたのではと云ふものもある。或小學校の校長が、五年生の女子に親の恩と孝行と云ふことに就て二週間話をして、級中で一番よく出来る生徒に、

「お前どう解つたか」

と質問した時に、

「私は順送りだと解りました」

と答へたので校長先生ギヤフンとしてしまつた。先生は一度も順送りなどは教へなかつたのである。そこへ私が恰度講演に行つたので校長は非常に喜んで居られたが、かゝる時代に、雷、四恩あり、これに従ふべしと云ふ丈では通らないのである。佛教は此の場合何と教へてよいか。

三 覺醒への生活

般若經に、

「小恩尙報ず、何に況や大恩をや、能く恩を知るは恩を報ずる者なり」

と小なる報恩をするものは大なる恩を報ずるものである。此の大恩を報ずるのが

「大乘佛教の菩薩であると云ふのであるが我々の實際を見ると、

「小恩時に報ず、大恩殆ど忘るゝ」

と云ふ有様、マツチ一本の小さい事には有難うと禮を述べる。然し、我身を育て、野の草にまで及ぶ太陽の光、その大恩は忘れ易い、やさしい他人の一言には情にほだされる人も、母親から云はれると、お婆さんは黙つてをいで——などと云つて何十年育て上げた母の言葉ははねつけるのである。

小恩は時に報ずるも、大恩は殆ど忘るゝ、と云ふのは事實であり、小恩尙報ず、何に況や大恩をや、と云ふ方は理窟であるが、人間が盲目的生活をするものであればそれでよいかも知れないが、人間には智慧があり、道理に従つて覺醒するものであるからには、小恩を犠牲にしても大恩を報せねばならぬのである。即ち人間は盲目にあらずして覺醒せる生活をせねばならぬのである。

佛教とは覺醒せる教へである、佛陀とは覺醒せる教の道を履み行くものである。

即ちそれに進んで行くのが佛になることである、盲目的生活から覺醒せる合理的生活に移ることが佛になることである。

四 父母の恩

覺醒とは小恩を犠牲にしても大恩を感謝することである。そこで親の恩、或は世間の恩と云ふて居る事柄は上つらから眺める時は小さく考へられる。隣家の親は金を遺した俺の親は借金を遺したと云ふことで親の恩を考へるのは、佛敎の言葉で云ふ有量有作の恩である。佛敎の報恩はかゝる金で計量する様なものではない。掬養の程度、教育を施されたか否か、財産を貰ふたか借金を貰ふたか、と云ふのは有限の恩である。有限の恩が果して恩恵であるか否かは解らない。

何故？金を十萬圓も遺した親の子は、貧乏人に比較しては親に恩があるかも知れない。然しそれが爲めに金も湯水の如く使ひ、遂に墮落して財産を蕩盡し、さてがないとは云へないのである。

「人間萬事塞翁が馬」

である。眞に人間性を子供に植えつけたか否か問題である。社會を辿る健全な人格、健全なる身體、それが根本である。現在の身體は父祖累代の力の重なりであり影がある。獨り我が建國以來の祖先のみならず、人類の祖先、生物の始、天地萬有の生命の結晶が現はれたのである。小さき身にたてこもつて考へずに、一度眼を放てば、無限の生命無限の力である。吾人はその後を受けたものであり、暫く親の名をかりて生を此の世に現はしたものである。祖先以來の系統を背負つた此の身

は子々孫々無限に貫いた生命である。現在の一時間は無限の祖先からの力子孫へ貫く力である。茲に於て覺醒せる人間生活を考へざるを得ないのである。吾人一日の誤りは先祖より子孫累代の誤りとなるのである。父母の恩とは此の流れに私を投じた無限の恩である。此の時間的無限の恩を佛教では父母の恩と云ふのであ。

五 國王の恩と衆生の恩

斯くの如く私共は、同じ様な人間が集つて社會をなして生活して居るのであるが、社會の代表は即ち國家である。現在の生活を考へた時、私共は横に無限の關係に育まれ同情と努力と熱心とによつて社會的に生きて居るのである。社會の力を完成したものが國家であり、その中心を考へた時、國王の恩となつて現れるのである。自己を中心として、豎に無限の時間——祖先より子々孫々に至る——を見、横に無限の空間——社會國家——を眺める。此の縦横無盡の恩恵を衆生の恩、天地萬

有の恩と云ふのである。一として天地の間に生命なきものとはないのであると考へ、生命の尊嚴さを現はし來り、我身一つが天地萬有の結晶であることに氣付いたならば、草の葉に置く一滴の露にも衆生の恩を感せずにはゐられない。

六 三寶の恩

以上述べた、父母、國王、衆生の三恩は現在状態の説明に過ぎないものである。私共は現狀に止るものではない。常に生き常に躍進し、變化し、進歩し、發展して束の間も止まざるものである。此の進歩して止まざるものは佛教では如來と云ふのである。如來の力は眞實に向つて止まざる力である。此の力の中に我々は生きて行くのである。この如來の力、即ち三寶の恩である。即ち有量有作の小恩でなくして、無量無作の大恩である。如來の進みに乗じ、なすべしと感じたまゝに進む。自分の身體を自分のものと思ふ時は、

「仕事は大勢、甘いものは小勢」

と云ふ様な考へが起るが自分の此身體は天地一切のものであるとすれば安逸は食れないのである。此無限の生命を知るものは、即ち四恩を知るものである。

三〇 自己と家庭及宗教

現代文化の缺陷……都會病も其の原因か……家族制度の理想と現實……現代文明の缺陷は何か……社會改良の根本問題……釋尊と阿難の對話……釋尊の悟と惡魔の襲撃

一 現代文化の缺陷

近來新聞紙上に續々として報道される事件は、何處かに或る共通の原因を見止める事が出来ます。其共通な原因とは一に生活苦でありませう。

近來の景氣が續いて、最近には其れが殊に深刻になつて來ました。明日の生活に心を悩ます人々丈でなく、諸ゆる階級の人々もいらくとして、此れが原因して色々な社會の問題や悲劇を起してゐます。主活競争の世の中で、弱き者は亡ぶべしと言ふて仕舞のは餘りに可愛想な事でありませう。

二には現代文化の缺陷でありませう。電車、汽車、航空機、近い所で衣食住に到るまで、花が咲き誇つた様に進歩してゐますが、其の根底に何等かの缺陷が存在してゐるのではありますまいか。印度のタゴールやガンデイは西歐の文化に向つて呪ひの言葉を發してゐます。タゴールは、

「現代の文明は機械文明であつて、尊い人類の生命と自然の生命との間に交渉が缺けてゐる」

と言ふてゐます。私は文明史は知りませぬが、タゴールやガンデイの言ふ所を否定して、西歐の文明に謳歌する事は出来ませぬ。此の文明の缺陷が社會に及ぼしたのだと思ひます。三には文明の特徴から生ずる世界都市の建設、即ち大東京、大阪を産む如き、人々が都會に集中して來ることから起る幾多の弊害でありませう。元來生きたるためには都會は實際便利な所であつて、現代文明に慣された私共には悠長な田園生活には飽足らずして神經に突き入る様なピリ／＼した生活を欲します。

彼様にして、知らず／＼に性質が短氣になつて、田舎の人々が土に親しむ様な悠長さや、純真な所がなくなり當事や投機の様な仕事を欲して、激しい苦しみを常に受けます。又一方彼様に肉感的になるのも無理もありません。都會病と云ふものがあつて、恐ろしい事件の原因となり、種々の犯罪や悲劇を引き起す基となります。

二 都會病も其原因か

元より犯罪や悲劇は都會にあつては始終起るものですが、その都會病と云ふものがよく多くの原因となるものであります。人間の作る社會であるから昔でも彼様に恐ろしい事件は起つた事もありませうが、世界都市の必然の運命として近頃は何處の町には暗影を收容してゐます。四には社會的生活の急激なる變化より來た家族制度の不調和でありませう。昔はよりよく家族が生活することでありました。然し日本が西歐の文明をかぎ始めてから種々な方面に急激なる變化を見た事は無理もな

い事でありませぬ。思想上に於いては特に然りであります。若い者と老た者は、思想上に於いても時代にあつても大差がありません。それで一緒に暮らす事を嫌がるのです。實際常識から考へて見ても、若い夫婦生活の幸福な筈はありませぬ。例外を除いて普通の大家族にあつては多少に拘はらず、現に彼様な苦しみの有ることを知ります。若い夫婦の悩みや苦しんでゐるのを良風美俗にもどる事だとして仕舞ふのは、餘りにも没人情的の言ひ草でありませぬ。私は大家族制度の精神を悪くは言ひませぬが、それに因つて起る若い者の悩みを非難する事はしませぬ。外國の様に老人を養老院に送ることは考へものですが、大家族が仲よく暮して行くことは理想であつてなか／＼出來難い事でありませぬ。駄々つ子の娘が厳格な家庭に嫁入りすれば幾多の苦しみを感じます。その苦しみが眞に其の者の人格を作り、女性としての完全な教育となるだらうか。事實はなかなかそんなに好くは行きませぬ。娘は恐ろしい父母だと思ひ込み、又父母は譯の解らぬ娘だ、嫁だと考へて仕舞つて、終には雙方の間

に不諒解な所が起つて家庭が不和になつて來るのです。終には其の家庭が嫌になつて來るのです。日本の様な文明の進歩の激しい國にあつては、思想上の差異が甚だしくして、其處に家庭不和の原因たる不諒解が生れて來るのです。

三 家族制度の理想と現實

日本に於ける家族制度は理想に於ては立派なものであらうけれどもたしかに缺けた所がある様です。若い人々が少い家族を欲求するのは、單に時代かぶれとも言へませぬ。又享樂的だとも言へませぬ、教育の矛盾や環境に支配される場合が多いのです。例へば學校時代にあつては聞くことを見ること爲すことが全部進歩的であるのに、一度家庭の人となれば舊制度てふものに束縛されて、總ての幻滅の悲哀を感じます。此處に悲しい事件の原因が潜んでゐることも肯かれます。又五には人生觀の變化でありませぬ。抑淨土宗の繁えてゐる地方では全體的に犯罪の起る率が

少いと云ふ事を已前に人から聞いた。又此度の龍野事件の批判に某検事正の方が彼様な事を言ふてゐられました。如何なる理由でありませうか。其れは、何と云ふても教をさいて心が和らぎ、人情が細かになつたのが第一條件でありませう。我田引水と非難されるかも知れないが、親鸞聖人程一般民衆に信仰を鼓吹した人はありません。親鸞教徒は佛の救ひ、佛の冥見を信じてゐます。又私共の生活は今生一生で終るのではなくて、未來永遠にかけて續くものだと信じてゐます。佛陀は我執をすることを苦しみの根本としてゐられ、又親鸞の信者は佛の前に向ふと、自から折れて無我の境地に住むものです。一面から言へば、其の信者達は弱くて、争闘的精神のない愚者とも云へ様が、此故に人生生活がなだらかになつて来る。又その信者の人生觀は享樂的でなくて眞面目に生き様とすることです。然し、人間たる以上酒や金を欲求はするが、哲學的背景を持つ享樂主義ではありませぬ。北陸の人々が全部彼様な信仰に燃えてはゐないが、一人でもそんな信者が居れば、近隣の人々が

教化されて来るものです。逆に言へば其の様な信仰状態に入れば、その様な人生觀を持つ立派な人が生れて来るのだとも言へませう。佛陀の救済を信じ、人生を道々求める道場として、樂を求めて行くのは哲學的な享樂とは言へませぬ。日本を全国的に見て見ると、彼様な人生觀は影を止めてたとも言へます。神も佛もなく人間萬能の時代になり切つて居ます。是の如きは近來精神の覺醒から生じたとも又文化の影響から來たとも言へ様が、要するに自我に餘りかぶれ過ぎたのが最大の原因でありませう。かくて、現代人は哲學的に享樂する、藝術や音樂を肯定します。私の言ふ事に不完全もありませうが、彼様な風にして人生觀に大變化を來した事は疑を入れない事實でせう。

四 現代文明の缺陷は何か

現代文明の缺陷は一體何に基因するものでせう。それはギリシヤの理智主義に源

を發した現今の分析的智識總てに機械化が侵入して始は機械を利用してゐたのに、近時は機械に利用されて來た。今日の文明に一は原因を置くのでせう。二にローマの法律に對する考への權利義務の觀念でありませう。人間相互の關係を商品の様に思つてゐる事でありませう。タゴールの

「生の實現」

と云ふ詩の中に

「ガンヂス河に船を浮べたら、大魚が夕日に鱗を黄金色に輝かしてゐた」

と云ふ風な雄大な氣分を起す時代が過ぎて、其の魚を金にし様食べ様と云ふ様な打算的な風になつて來てゐます。鴨立つ澤の秋の夕暮は生れなくて北極南極を今日の旅行地とする人々が生れ出て來ました。ガンヂイの言葉を借れば、

「糸くる民が絶えて、機械の油に惱む奴隷が出來た」

と言ふてゐます。近來西洋の人々が東洋とか東洋の文化と言ふ言葉を出してゐま

すが、華やかな文化の背後には、森林に居ないで森林にいてふのだと云ふ様な悠長な氣分が横たはつてゐます。

以上、私は現代のいろ／＼な事件を見て、その大なる原因は現代文化の缺點に有ると云ひました。私共は現代人の一分子である以上、その悲劇を自分にも關係しないものとする譯にもゆきませぬ。私共は社會的は共通であるから、其の恐ろしい犯罪や悲劇を引き起す様な共通の要素を持つとしなければなりません。共同生活なすものには、他人の事は自分の事でありませぬ。故に近來起つた犯罪も矢張り自分の事として考へて見なければならぬ。

五 社會改良の根本問題

總て私共が或るものについて改良を施し度いと思ふ時に取らねばならぬ條件が二つある。一は改良せんと欲する他のものについて考へて見ることであります。一

は自分を考へて見る事でありませぬ。例へば社會を善に導き、改良を加へ様とする場合、社會其のものをよく考へなければなりません。又社會の一人である自己を深く考へて見なければなりません。宗教の立場から云へば第一は即ち自己を先づ内省する事を取ります。社會改良の根本は自己の心を改良する事です。各人が自己の本心に立ちかへりて、完全な物としなければ、何物をも解求し、改良する事は不可能であります。現代人が現代文明に自覺を持つならば、その缺點を補ふことが出來て從つて文化の方向も決定される譯であります。近時女學校に於いては倫理の時間に先生が結婚するなら、成るべく小家族の家を選べと言ふてゐるさうです。然し其れ丈では駄目だと思ひます。若い娘が理想とまで憧がれてゐる夫婦差向ひの生活でも時日の經つに從つて何時か倦怠が生じて來る。又それが普通であるのです。外の眼から幸福そのもの、様に見えても事實は決してそうでない。だから、大家族で不幸を感じると同情に小家族にても同様であります。

六 釋尊と阿難の對話

此の事について私 は次の話を思ひ出すのであります。橋賞彌の町に釋尊が行かれた事がありました。所が其の町で釋尊は御弟子と共に色々の方面から迫害を受けられたのです。其の有様を見て、阿難は

「此の様な町に居るよりも他の町に行きませう」

と申上げたのです。所が釋尊はお前は此の町に住み難くいから、他の町に行かうとするのだらう。だが、然し他の町でも同じ迫害を受けたらお前等は何うするのだとお答へになりました。其處で阿難は更に、

「王舎城もクシナラの町もあります、其處へ行つたら此の様な事はありますま

51

と又申し上げた。其處で釋尊は更に、

「阿難よ其の様な事では限りがない。私は此の町で迫害の止むまで待つて然る後他の町へ入らう」

とお答へなされたと云ふ事でありませぬ。阿難は境遇さへ變ればよい様に思つてゐたが、釋尊は心を中心として如何なる境遇にも住み給ふ方でありませぬ。彼様な事は一の觀念論の様にも思へませぬ。見ざる聞かざる言はざるの獨りよがりではありませぬ。釋尊の自分を中心とする主義は悟りの内容たる、縁起説から出てゐて、此れは佛教に於ける重大なる根本義になつてゐます。何時も申すことですが、一言にして申せば、總ての物は自證の上に成立してゐると考へられる。自己の世界は結局自己の投げた影に外ならぬものであり、無明と愛欲とに基因するものであります。故に此れを解脱すれば、自然涅槃の境地に入り得るのであります。淨土も穢土が己が心の中にあるもので、三界唯一心と言ふ言葉は此の事を示す言葉でありませう。此の縁起説によりて三界唯一心と言ひ、すべての問題は自己の心の中にあるのだと

教へるのです。

七 釋尊の悟と惡魔の襲撃

釋尊の悟りは惡魔の襲撃に討勝て得られたもので、惡魔の襲撃が若しなかつたらその悟りは得られなかつたのでせう。北海の荒波にもまれた魚にのみ油多く、又美味しいものである。又人り困難や苦しみの波濤を越えて始めて光輝くものであります。恵まれた性格を持つ人は如何なる困窮の中にも自己を支持して、其の中で立派に人として生命を見出して行くのである。是の如き人は常に己れを反みて行く人でありませう。自己を眞に知らなければ常に裏切られ、人生は苦其のものの如く感ぜられ、又其の人々には宗教も信仰も湧いては來ないものです。古人も

「三度省りみる」

とか又、

「汝自身を知れ」

と言ふたのは、そんな意味を教へたものに外ならないのです。釋尊が惡魔を降服し、悟りの境地に入られたのは、人間としての心を眞に知られたのであります。人間は、心の愛欲とか無明などの十二因縁によりて自己を形成し、此れに因りて苦しみ、悩みつゞけるのであります。釋尊は此れを超越し、解脱された方で成道の時に「愛欲よ、汝は迷ひの家を作るものである、今は其の姿は見出された、最早其の迷ひの家を作ることはない」

と云ふ意味の偈を作りなされました。釋尊は此れから佛教心理学と云ふ様なものを作りなされた。即ち、六根六境六識の三つが和合して感覺、感情、意思、決定が起つて来る。此處に私共の心の中に具體的の氣持ちが湧いてくるのであつて釋尊に言はせると其れ等は皆、欲である。私共の心の本質を愛慾や無明の混がらがつて出来るものであります。此の故に、眼前の物に對して愚痴であつて従つて惡徳を

起すのであります。此の釋尊の教へによつて深く自己を内省し、あの恐ろしい龍野事件を考へて見れば如何でありませう。事件を起した人々を別種の人とは思へませぬ。

法然上人は、

「十惡の法然坊」

と自から呼ばれ、又親鸞聖人は、

「無明煩惱しげくして塵砂の如く遍滿す、愛憎違順することは高峰岳山に異らず」

「愛欲の廣海に沈没し、名利の大山に迷惑す」

と歎かれた事を思ふとき、私共は泣かずにはゐられませぬ。此處に私共は高上りした心から下りて懺悔の生活に入る事が出来るのです。此の氣持ちが向ふと同情となりませう。此の様な氣持ちが今少し働いてくれたらあの慘ましい結果は生れなかつたでせう。聖徳太子があゝの有名な十七憲法の第十二條に、

「共にこれ凡夫のみ」

と言ふてゐられます。實際私一人が凡夫に過ぎぬ事を自覺したら、相互の間に同情や譲り合ひの念が生じて、家庭は平和に育まれる事でありませう。私は此の十二條に書かれた御言葉を味つて畏れ多い事ながら十七憲法が眞に私に生きて來た事を知ります。此れは佛敎の反省を教へる思想から來た太子の境地と思ひます。

三一 家庭幸福の根底

科學の力、物資の力……今日は眞の文化でない……個人主義
對國家主義……我國の家庭制度……家庭と社會……社會事業
は不幸……社會事業と家庭生活……人生の幸福は是れ

一 科學の力、物資の力

想ひ起せば私共日本人は、凡そ六十年前までは、世界の太勢などといふことは、更に知識がありませんでした。徳川三百年の榮華の夢に酔ひ、駭々乎々として開展して行く世界の太勢などは、露知らず、鎖國攘夷といつて外國人と口を聞くのも穢はしく思ひ、唯々無暗矢鱈に、之を排斥して居たのであります。所が彼の有名なる、米國の黒般が浦賀灣頭に來つて、頻りに通商を求め、のみならず、恐しい威嚇をさへ與へられたので遂に開港といふことに國論が一決して、さしも煮えくり返

つて居た國中の騒ぎも静まつて、我が國は單に、東洋の日本ではなく、世界の日本として、華々しく門出をすることになつたのであります。

それより春風秋雨、星移り物變つて、大正も幾つかの年を迎へた。日本の現状を見るとき、轉た感慨に堪へないといふのも、實に意味深いものがあらうと思ふのであります。

斯様にして外國との交通が開け、坐らにして世界中の出來事を知る事が出來たり何の苦もなく世界各國を廻つて來ることが出来るやうになり、或は電信、電話、汽車、汽船の發明になり、飛行機であるとか、無線電話であるとか、到底想像にも空想にも及ばなかつた科學の偉力が、どしどしと我が國にも、押進んで來たのであります。言ひ換へれば、此等科學の力、即ち物質の力がありますが、これと反對の精神上の問題も、種々流れて來たのであります。

二 今日眞の文化でない

斯様にして我國は、近々五六十年にして、東洋の文明國、世界の一等國となつたのであります。そして人々は、今日では一口に文化とか、文明とか言つて居りますが、能く考へて見ますと、今日の所謂文化とか文明とかいふものは、物質的の形だけの發達で、精神的の内面の方は、少しも發達して居らないやうに思ふのであります。幾ら形だけは善くつても、中實が腐つて居ては、何としても仕方のないことではありません。私は今日の文化は、眞の文化ではない。變則な不完全極まる文明であると思ふのであります。

その證據には、今日その文化なるものが齎した、精神的思想的方面を觀ますれば直にうなづかれることでもあります。やれ個人主義だとか、民主主義だとか、社會主義だとか、いろ／＼なる思想か瀾漫して參つたのであります。人々は文明とか文化

とかいふ空名に惑はされて、西洋のものでさへあれば、その正體が何であるかの辨別もなく、どんくくと受け入れた、受け入れたといふよりか、寧ろ進んで自ら求めこれに憧憬し心酔するといふ有様でありました、殊にかうした傾向は、淺薄なる學者や、輕輩なる青年たちに多いやうであります。自分を忘れて他人の物を求めるといふことは、意義のない許りでなく以ての外のことと思ふのであります。

三 個人主義對國家主義

さて我國は、御承知の通り家族主義の國であります。そこへ此等の個人主義的思想が澎湃として押寄せて來たのでありますから、國民は驚きました。身分の外には親も兄弟もない、又國家も社會もない、先づ一番なのは此の己だ。

「この己だけが一番大切だ」

といふ聲が、先に立つてから、家などと言ふ事はてんで顧りみない。従つて古來

の家族主義は亂れ、道義は地に墮ちてしまふといふ事になつたのであります。所が一方の側では、さうは考へない。自分は捨てゝも、親も兄弟を救ひ、家を立派に立てゝ行かうとするのが、日本古來の人倫であります。日本國有の精神を有する年とつた者から見ると、

「今の若い者たちは、心得が違つて甚だ怪しからん」

といはねばならぬのであります。

さて議論は何れにしましても、吾々人間として、此の世に生れて來た以上は、どうかして幸福にして、此の世を送りたいと思ふのが當然であります。けれどもこの問題なのは、それならどうしたら幸福に暮らすことが出来るかといふことであります。勿論人の幸福は其の種類も多く、又その幸福とするところも、家族的の關係より受くるところの幸福は人生の幸福中の最大なるものであつて、何人も之れを欲しないといふものはないといつて善いのであります。即ち夫婦の相愛敬するところ

ろから生ずる幸福も、大なるものでありますし、親子の關係より生ずる幸福も、決して小なる者ではないのであります。既に家といふことは、幸福を聯想せしめるものであります。斯様な家族的の幸福は、家の組織が完全であり、家庭の關係が圓滿なるに随つて、始めて得られることは、今更申す迄もないことであります。私は一步進んで、我が國の家族制度は、單に自己の幸不幸といふばかりでなく、國家社會にどんな密接な關係があるかと、考へて見たいのであります。

四 我國の家庭制度

我が國家の組織は、歐米諸國の成立と異なりまして、家族を本位とし、個人を單位とするものではないといふことは、常に説かれるところであります。洵に我が國は、家族をその單位とすることが、法製の上からも之れを認め得ることでありました。我が國體と共に誇るべき特徴であります、歐米諸國の社會は、家族を本位とし

ないで、個人を本位として居るのであります。國家と個人との間に家といふものが介在することはないのであります。家がないといふのは、御承知でもあらうが、歐米には我が國のやうに、祖先より承繼いで之を子孫に傳へる家がありません。それ許りではなく、家長といふものは認めないのであります。此の意味からして我が國民は、一大家族であるとも言ひ得る次第であります。

個人主義の歐米に於ても、尙その祖先に有名なものがあるときは、子孫はその系圖を話すことを誇りとして居るやうであります。人には歴史を尙ぶ性質が具つて居るといふ事が出来ませう。有名な人の傳記を著はさうとするのも、又は溯つてその祖先のことを吟味するのも、皆この性に外ならないのであります。今、人が必ず組織する家を、子々孫々に傳へ、子孫は之を祖父に承け繼ぐといふのは誠に自然な人性の欲求であります。我が家には過去あり現在あり、そして又未來ありとする方が、どんなに人性の自然に適ふか知れないのであります。國は國の歴史があり將

來あるを以て誇りとし、都市も農村も各々その過去の歴史を有し將來の發展を希望するのは自然の事であります。單に營利を目的にして居るところの商會社でさへ尙その創立の古さを誇りとして、過去の歴史を語ることを忘れないではありませんか、若し我れらの家に、語るべき歴史がなく、希望すべき未來なしとするのは、頗る人情に反することと思はるのであります。

五 家庭と社會

凡そ如何なる人も、家族的關係に立たない者はないのであります。であるから個人の發達を希ふも、或は個人の幸福の爲めにも、家は必要であつて、その隆盛を希望すべきものであります。之を言ひ換れば、個人の發達幸福は、家族の發達幸福と相關係し影響するものであります。

若し家族として發達のないときは、少くともその關係に於て、人の發達は缺けて居るといはなければならぬのであります。若し又他方面より之れを考へますならば理想的の家庭の協同によつて作られた都市なり町村ならば、當然理想の都市なり町村なりであります。従つて斯る集團に依つて作られた國家社會は理想的なものであることは、これ亦當然の事であります。言ひ換れば、人類が進歩して理想的の域に達するときには、即ち個人が理想的の域に達したときであり、又家庭が理想の域に達したときでなくてはならないのであります。此の意味に於て家庭は實に、小にしては各個人と、大にしては國家社會と、密接不離の關係にあることを、深く思はなければならぬのであります。

近來我が國には、西洋からいろ／＼の學問や思想が、侵入して参りました結果、建國以來二千有餘年の誇るべき清史と、最も意義の深い家族制度とを無視し、或は之を否定するやうな徒が輩出するやうになつたのは、何といふ憂ふべきことであります。さういふ人たちは、家庭はどはどうでもよい、自分さへ幸福であれば、家

庭などは、寧ろない方がよいといひますけれども、さういふ人たちでも、矢張り家庭に生れ、家庭に育まれた者ではありませんか。若し家庭に生れない者があつたとしたならば、その人は家庭といふものを無視し、否定したところに置かれた爲めに家庭の恵みと悦びとを知らない人のいふ言葉であります。事實今日の社會に於て、不良兒や犯罪者は、一に家庭の缺陷、若くは家庭なき境遇に育てられたる者が、大部分を占めて居るのであります。之と反對に、忠臣義士や、偉大なる人物、國家社會に貢献する模範的人物は、何れも良き家庭に生れ、良き家庭生活によつて育まれた者であります。

教育の上に於ても、今日は學校よりも、その家庭教育が重要視されて居ることは御承知の事と思ひます。

不良なる家庭の子文が、社會の模範的人物となつたといふ様なことは、私はまだ寡聞にして耳にしないのであります。斯様な家族制度と家庭生活とが、各個人のしいものであることは、最早や繰返していふ迄もないことであります。

六 社會事業は不幸

近頃は貧富の懸隔が甚だしくなり、社會問題といふものが、大にやかましくなつて參りました。そしてそれに對する應策として、養老院、孤兒院、感化院などといふ慈善事業が盛になつたのは、誠に結構なことでありませう。といひたいが私はいふこれらの慈善事業が必要になつたといふことは、決して結構なことでは無いと思ひます。かういひますと、氣の早い人は、社會事業——慈善事業に反對するのかと咎められるかも知れんが、私は決して其等の事業に反對したり、隨喜しないではありません。そんな必要が生じた以上、反對どころか、大に力と致すべきであります。けれども老後は、國家又は道府縣市町村若くは私の團體が、養老院の世話をして

やつたり、子供は孤兒院の手に渡さなければならなくなつたり、又は感化院へのり込んだりしなければならなくなつたのは、一つには従來の家族制度といふものが亂れて、次第に家庭生活にひびが入つた結果ではありませんか。そして其等の事業が盛になつたといふことは、取りも直さず、幸福からも理想の社會からも、遠ざかつて來たことを意味するのであります。如何に社會事業が盛んになつても、慈善事業の説備が改善されても、其等の事業が不必要にならない限り、個人も社會も國家も決して幸福でなく、進歩でもなく、發展でもなく、文明文化でもないと思ふのであります。

七 社會事業と家庭生活

歐米の社會では、規模の宏大な孤兒院が到る所に設けられ、設備の完備した慈善病院や養育院は、その數を知らない程であるといひます。そこで寄るべない孤兒は

兒院に收容され、老病者で扶養看護者のない者は、養育院、慈善院に收容されるのであります。新様にして博愛人道の精神は、世の不幸なる者に及んで居るのであります。けれども親族縁者でもない他人の手に依つて世話を受ける、此等の孤兒や老病者は、或は親族、縁者の温い情、行届ける手に依つて保護せらるゝに比べたならば、實に憐むべきであります。私は我が國の慈善事業の歐米に比して盛大でないのは、一には家族制度の未だ全く廢れない證據であると悦んで居るのであります。そして此の家庭生活の何者であるかを反省し自覺して、眞の光輝ある惠ある家庭たらしめるやうにお互に努力したいと思ふのであります。

私共の幸福に最も必要な家庭は、如何にしたら光輝あり、幸福に満ちたものとすることが出來やうかといふことが、愈々殘された問題となつたのであります。私は是れにはどうしても各自の家庭は、信仰といふものに依つて治められ、維持せられて行かなければならないと思ふのであります。私共は能く家庭の不和の親

と子、姑と嫁、老人と若者といふやうな、紛争を耳にし、眼に見るのであります。それは何によつて起るかといふならば、信仰といふものがないところから、起つて来るのであります。我が佛教では、因果といふことをやかましくいふのであります。これが凡ての方面に現はれて居ることでもあります。この道理を考へますならば、過まつたことや正しくないことなどをしようとしても出来ない筈であります。若し老親に邪見な嫁があつて、常に不親切な仕打をしたならばその嫁は必ず自分の老後に、同じ悲惨な運命の報が来るのであります。之に反して善因を施して置いた者は必ず善果を得るのであります。それは誠に當然のことで、若し自分のしたい丈のことでして、好いことを望み、又それが得らるゝなら、この世は闇黒であります。信仰の生活は、感謝の生活であります。この報恩といふ心、感謝といふ念がありますから、決して争つたり、不和を惹き起したりすることは出来なくなるのであります。けれども、私共の日常生活はこの信仰の目が開いて居ない爲めに些々たる小事から平和を破つたり、幸福を敗したりしてしまふのであります。

八 人生の幸福は是れ

むかし信州善光寺の近くに、慳貪な老婆がありました。その邪見なところから、嫁との折合も悪しく、家内常に不和が絶えませんでした。一日この老婆が、洗濯をして居りますと、一匹の牛があらはれて、老婆の布を角に引掛けて走り去りました。慳貪な老婆は、布の惜しさに後を追つて行きますと、牛は遂に善光寺の中へ消えてしまひ、老婆の前には、金色燦爛たる阿彌陀如來の御姿が現はれたのでした。老婆はその靈感に打たれて、心性一變し、それから慳貪邪見な心情は消え失せ、嫁に對しても、生れ變つた程やさしい姑となつて、圓滿な幸福な家庭を作ることが出来たといひます。

所が世間の人が一朝にしてかう改まると善いのでありますが、熟々世間を見渡す

と、兄弟互に争ふとか、親子が忌まはしい争闘をするとか、夫婦互に権利を主張して果てしがないとか、いろ／＼のいさかひがあります。これらは我が身を知らない、恩恵を知らない、つまり信仰心のないところから起る悲劇であります。財産や名譽と違ひ信仰は何時でも、又如何なる人でも、直に求められるものであります。即ち個人の幸福の和樂の基礎は信仰心に依つて築かれるのであります。

世の中には相當の資産があつて、物質的には、安樂なる生活を送つて居るものも少くありますまい。けれども如何に物質に富み、權勢を有して居たとしても、その家庭に温みがなく、老いて荒涼なる晩年を送るならば、精神的に悲惨不幸なる生活といはなければなりません。如何に權勢を専らにした人も、如何に活動した人も如何に名聲を得た人も、その老年に及んで樂むところは、横勢でも事業でも金錢でもない。書畫骨董の樂みも、さしたるものではない。このとき人生の幸福とするところは、兒孫の日夕定省を怠らず、その心を慰めてくれることでなければなりません。これ畢竟、家庭生活の齎す幸福であります。これは何に依つて得らるゝかといへば一家の和合團欒たる、一に宗教的信仰生活に依つて、始めて其の恵みに浴することが出来る、と深く信ずるのであります。

三二 佛教の目的

僧侶は何をして居るのか……形式に流れたる佛教……生きたものが相手……慈善事業と佛教……佛教本来の目的……應病興藥

一 僧侶は何をして居るのか

近頃或人が私に向つて、

「僧侶は一體何をして居るのか、最近の調査な依ると我國には佛教各宗を合せたら七萬一千九百二十七ヶ寺と十萬七千三人の僧侶及び生徒とがあるそうであるが、そんなに澤山の人があつて一體何をして居るのであるか、これと云ふ目立つた仕事をして居るやうでもないではないか。」

と云ふたから私は、

「左様、大部分は葬祭の仕事をやつて居る、一部分のものが社會事業の慈善救済と云ふやうなことをやつて居る。そして極僅少のものが眞に佛教の目的に向つて努力して居るのである」

と答へた。世間の人が佛教を解し得ないのも無理のないことである。今日では佛教の目的に向つて努力しつゝあるものが實に少ないので、世間の人は佛教と云へば直に死人と云ふことを聯想する、葬式と云ふことを聯想する、年忌と云ふことを聯想する。それで抹香臭いと云ふことになつて佛教の眞精神は何であるかと云ふことを尋ねやうとするものが至つて少ないのである。

二 形式に流れたる佛教

日本は佛教國であるかと大乘相應地であるとかと云はれて居るけれども、今日の國民には葬祭と云ふ儀式を除いては殆ど佛教の何物であるかと云ふことが領解され

て居ないのである。無宗教の状態に化しつゝあるのである。これは要するに求むるものに、熱心が足らぬと云ふ罪があるけれども、與へる僧侶が其職責を盡さんだとなふ大なる罪があるのである。斯様に成り來つたのには其原因がある。徳川時代には幕府が切支丹を邪法として之を排斥する爲めに人民に宗門を定めしめた。それで人民は佛教の何宗かに附ねばならぬことになつて宗旨帳を僧侶があづかつたので佛教僧侶は戸籍を管理する權を附與せられた。それからと云ふものは人民が死ぬと云ふ時には必ず何宗かの儀式によりて葬式せねばならぬ事になつたのである。其だから當時の僧侶は葬祭と云ふことを主なる仕事としたのである。この風習が今日にまで傳はつて世人をして佛教と葬式と云ふことは離るべからざる關係があるやうに思はしめ、甚だしきに至つては佛教は葬祭を執行するのが目的であるかの如くに思はしめ、また僧侶の或物にもそんな感を抱かしむるやうになつたのである。水でも沈滞すれば蟲が生くやうなもので、僧侶を優遇した結果が、形式に流れて佛教本來の目的を解し得ないやうになつたのである。

三 生きてるものが相手

佛教は死人を相手にするのではない。生きてるものを相手として之を救済するのである。葬式ぢや年忌ぢやと云ふて、死んだものに讀經の廻向をした處でそれが何になるか。いくら大きな聲を張り上げて引導を渡しても死人は聞きそらな筈はないのである。勿論、葬式や年忌にもそれ／＼の意義があつて眞宗などでは死んだものゝ爲に修するのではなくて生きて居るものゝ信念修養の爲めに修するのであるといつて居る。それなれば意味は明瞭である。親、兄弟、親戚、知人等の葬式に立ち合ふて見ると云ふと人生の何物であるかと云ふことを考察する好機會を得るのである。平生は塵事の爲めに追ひ使はれて居て人生の何物であるかと云ふことを考察するに暇のないものである。一たび

「死」

と云ふことを眼前に見せつけられては何等かの感想を浮べすには居られないのである。千言萬語、喃喃たる説法を聞くよりも、親、兄弟、親戚知人などが眼前に幽明處を異にし生死を別にすると云ふ事實を見せつけられた時に起る感想は幾十倍、幾百倍、痛切なものを得るのである。また此迄親しくして居つたものが一朝にして死んだからと云ふて、知らぬ顔をして居る譯には行かぬ。それを愛惜して野邊に送ると云ふやうなことも人間に起つて来る自然の情義であるから、これを葬るに相當の禮義を以てするのは云ふ迄もないことで、それから二年、三年と月日の重なる間には時々先きに死んだ人の事を思ひ出す。それで其遠を追ふ所の情義から、其時には親戚知己が相會して生前の事を語り、また自己信念修養の機會を造ると云ふことも必要なことで、かうなれば葬式にも年忌にも多大の意味があつて、此を掌るのが宗教家の任務として適當なものであるが、世間の多くの人は死んだ人の爲めにや

る仕事のやうに思ふて居るものであるから僧侶のやつて居ることは抹香臭いと云ふのである。それであるから葬式をするにしても年忌を勤めるしても僧侶の方から其意味を明瞭にして死人を相手にせずして生きた人を相手にするやうに仕向けねばならぬのである。

四 慈善事業と佛教

生きたものが相手であるから、葬式や年忌の時ばかりが僧侶の仕事をする時ではない。大慈悲心を以て衆生を救済すると云ふのが佛教の目的なのである。それで昔からでも道昭、行基、傳教、弘法と云ふやうな高僧は盛んに社會、救済の事業をやつて、道路を通ずるとか、山林を開くとか、橋梁を架すとか、池沼を穿つとか、其他孤兒貧窮を救済すると云ふやうなことを遣つて居られた。併しこんな有形上の社會事業は僧侶の手を假らずとも、世が開けて來れば、國家が必ず經營せねばなら

ぬことであるから、これも佛教本來の目的と云ふものではない。他を誘引する方便の方法である。併し佛教に活氣があつた時代には、そんな事にまで盛んに手を出して人民に幸福を興へることに勉めたものである。それだから人民も又大に佛教の眞面目を味ふことが出来たのであるが、佛教を形式化してからと云ふものは、こんな事も十分行はれぬやうになつたが、近來は追々と孤兒院・感化院・無料宿泊所、養老院と云ふやうなことを經營して居られるものもあるやうになつた。死人を相手にして居るより比ぶれば、これは幾十倍勝れたものと云はねばならぬ。

五 佛教本來の目的

併しながら佛教本來の目的はそんな有形的、物質的のものを以つてやるのではない。心靈の救済と云ふことが目的なのである。これを個性的に云ひ換ゆれば轉迷開悟と云ふことである。迷妄を脱却して心眼を開くのである。自分は何等迷ふて居る

やうに思はぬが、世人はみんな迷ふて居るのである。佛陀の教によりて其迷を脱却して心眼を明瞭ならしむるのが佛教の目的である。暗夜に方角を取り違へたものがあつて西と東を間違へて、西へ行くべきをどん／＼と東の方へ行く。併し本人は取り違へて居ると云ふことを知らないのである。取り違へて居ると云ふことが知れて居れば迷ひはしないが、知らないものであるから、やはり間違へて東の方へ行く。其を心得たものが前には間違へて居る、其處は行くべき處でない、西は此方の方である導くものが間違ひではないかと反つて疑つて居る。併し能く方角の事を聞かされて見ると云ふと、何だか變である哩と氣がつく、それで或はそうかも知れぬと云ふことになつて、遂には正しき道を辿ることが出来るのである。人生の事がらやうどそれである。昔のやうな單純な時代であれば迷ひ道も少なかつたのであるが、現代のやうに種々の思想が雜然として起り、人生は快樂の追求であると説くものも

あれば、努力主義を主張するものもあり、犠牲的精神を鼓吹するものもあれば、功利、實利を唱へるもの本務主義、何々主義と數へ來れば幾十百條の岐路があつて、どの道を辿つて善いかと云ふことが分らぬ位である。否、みんな其辿つて行く道が尤も正しいものとして迷路に沈み行くのである、ニーチエである、トルストイである、ユンケルであると云ふやうな種々の思索家が考へて居ることには眞理があるかは知らぬが、動もすれば小思索家が奇を衒ふて云ふ言葉には邪路に導くものが多いのである。佛教徒は佛陀の教によりて正しき道を辿らねばならぬのである。

六 應 病 與 藥

佛教には大乘 小乗 と云ふことがある。乗とは Yana と云ふて運載を義として乗物のことである。大人の所乗、小人の所乗と云ふことである。詳しく云へば迷より悟に至らしむるに、大苦を滅して大利益を與へる教道と、小苦を滅して小利益を與

へる教道とがあるのである。これは大別したのであつて微細に云へば八萬四千の法門と云ふやうに種々の教があつて其説さやうが一類でない、病氣に相應して藥を與ふるが如く、衆生の根機に相應して法を説くのである。其法が機に相應すれば何れか何等の得る所があるのである。古來から佛教を研究するもの、中には何々は了義經と云つて眞實の教であるが、何々は不了義と云つて方便の教であると云ふやうに云ふたものがあるが、そんな譯なものではない。病氣にはそれ／＼の藥があつて、その藥が病氣に相應すれば病は癒えるが、どの位高價な藥でも相應せねば利目が無いのみならず、反つて害を及ぼすことがある、風邪には風邪の藥、脚氣には脚氣の藥が眞實と云はねばならぬのである。して見ると云ふと現代の人の精神的病氣を見届けて、それに應じて法を説かねば、佛教はこんなものだと八萬四千の法門の陳列會を開いても、古物展覽會を見るよりも哀れなことになつて仕舞ふて何の益にも立たぬ。これは法を説くもの、心得を一寸述べたのであるが、聞くものになつて見

1670
57

20278

ると、そんなことを云はれては、佛教と云ふものは、丸で雲を攫むやうなもので取り止めがないと云はれるか知らぬが、佛教本来の目的は、そんな化石のやうに一つにかたまつて仕舞ふものではない。肺病患者に腰痛の薬をあてがふやうなものではないのであるから、佛教の形式や言陳に拘つてはならぬのである。義に依つて語に依らずと云ふのが元來のすはりである。釋尊は三千年の古へに印度に生れて法を説かれたのであるから、其言葉は勿論印度語を用ひ、また印度人の思想とか習慣に順應するやうに説かれ、また其背景に現はした世界觀なども印度人の思想に納得の出来るやうにせられたものであるから、其形骸に拘つて居ては佛教を解することは出来ないのである。併しまた佛教が他の宗教、學術等と異なつた特點とも云ふべきものがないでもない。それは小乗では三法印、大乘では一法印と云ふのである。

終



◎ 昭和二年 九月 一日印刷
◎ 昭和二年 十二月 十日發行

「應 病 與 藥」
定 價 金 二 圓

不 許
複 製

述 者

道 重 信 教

發 行 者

石 田 彦 三 郎

印 刷 者

月 輪 治

印 刷 所

昭 和 堂 印 刷 所

◎ ◎ ◎

發 行 所

東京市本郷區湯島三組町
電話 五 五 四 五 九 番
振替東京一五七八〇番

中 央 出 版 社

◆◆◆ 中央出版社 圖書目録 ◆◆◆

□ 佛教より觀たる人の一生 九版 文學博士 南條文雄著 定價二圓五十錢 送料金十八錢

□ 親鸞の觀たる人の一生 三版 下村誦信著 定價二圓五十錢 送料金十八錢

□ 觀音信仰と人の一生 三版 小瀧 淳著 定價二圓五十錢 送料金十八錢

□ 高僧の觀たる人の一生 四版 平松貞夫著 定價二圓五十錢 送料金十八錢

□ 修養の極致 處世の秘訣 洗心錄 六版 新井石禪著 定價二圓五十錢 送料金十八錢

□ 心頭滅却すれば火も亦涼し 三版 新井石禪著 定價二圓五十錢 送料金十八錢

□ 求めよ與へられん 三版 釋宗演著 定價二圓五十錢 送料金十八錢

□ 三百六十五日 佛教講話 今日のお話 三版 下村誦信著 定價二圓五十錢 送料金十八錢

□ 禪により身心を練磨る英雄 三版 谷 至道著 定價二圓五十錢 送料金十八錢

□ 平易に説いた 眞宗の教義 改版 文學博士 南條文雄監 定價一圓八十錢 送料金十六錢

□ 觀音信仰の體驗 三版 小瀧 淳著 定價二圓八十錢 送料金十八錢

□ 人生の旅 新版 大内青巒著 定價二圓五十錢 送料金十八錢

□ 趣味と研究とから解剖した 佛様の正體 三版 土谷春堂著 定價一圓八十錢 送料金十六錢

□ 平易に説いた 釋迦一代記 十版 江部鴨村著 定價一圓八十錢 送料金十六錢

□ 傳説に残れる 高僧の生んだ奇蹟集 三版 高島玉泉著 定價一圓八十錢 送料金十六錢

□ 人間の善悪 三世に廻る 佛教因果物語 四版 土谷春堂著 定價一圓八十錢 送料金十六錢

□ 読んで面白く 修養になる 高僧逸話集 三版 土谷春堂著 定價一圓八十錢 送料金十六錢

□ 読んで面白く 修養になる 禪僧問答集 四版 土谷春堂著 定價一圓八十錢 送料金十六錢

□ 精神 修養 日蓮聖人法話集 三版 高橋北堂著 定價一圓八十錢 送料金十六錢

□ 精神 修養 親鸞聖人法話集 新版 高橋北堂著 定價一圓八十錢 送料金十六錢

□ 笑ひながら 修養になる 一休珍話集 八版 土谷春堂著 定價一圓八十錢 送料金十六錢

□ 笑ひながら 修養になる 白隠珍話集 三版 土谷春堂著 定價一圓八十錢 送料金十六錢

□ 禪學 講話 南天棒禪話集 三版 中原鄧州述 定價一圓八十錢 送料金十六錢



